

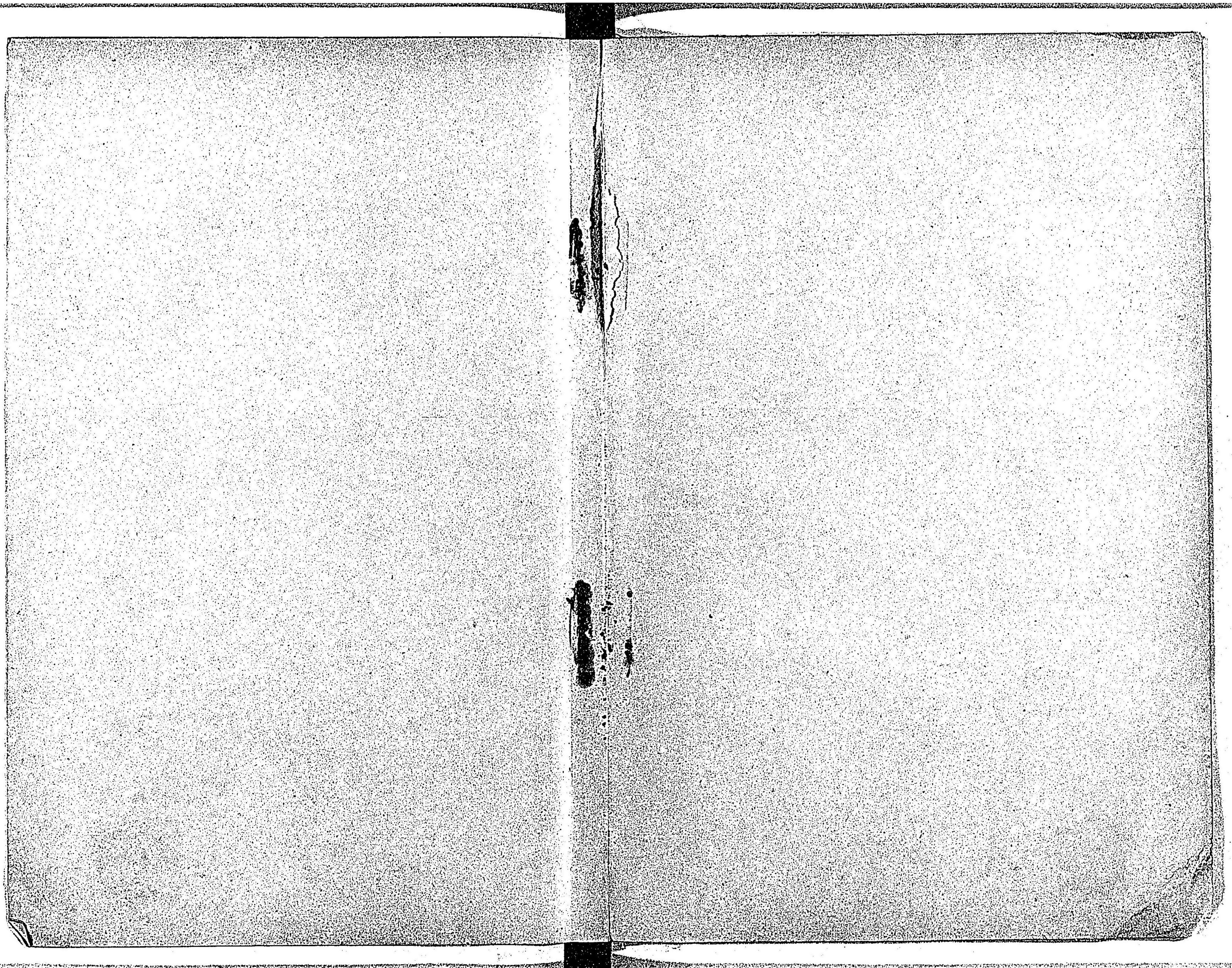
11  
11

欽定  
解記

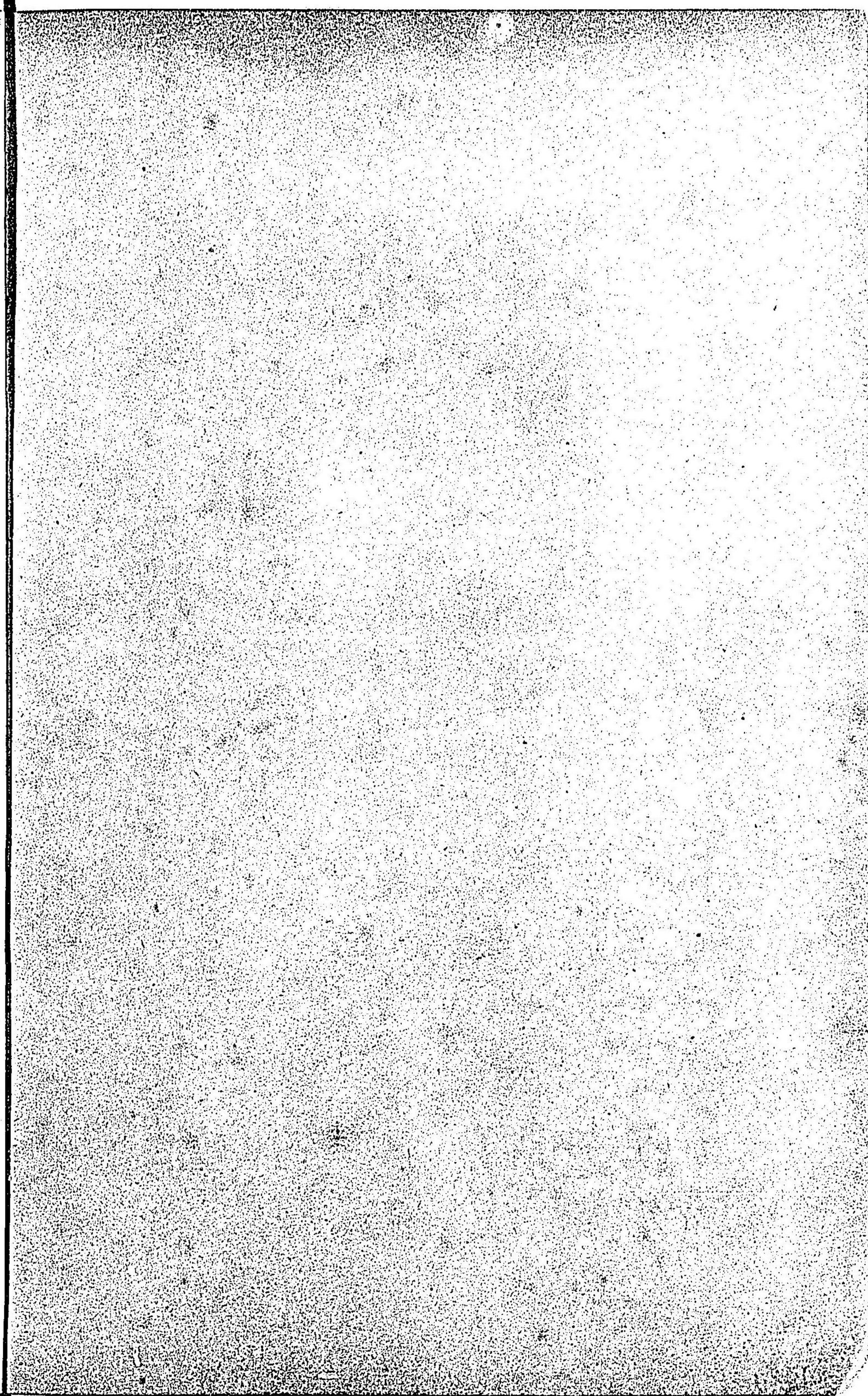
環  
羽

213/2  
11











特107  
862

秋山四郎著

史記  
鈔解

項

羽

明治  
44. 5. 5  
丙寅

東京 金港堂書籍株式會社



特 71  
895

### 史記鈔解緒言

史記は漢の司馬遷しはせんの作にして、十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳の百三十篇より成る。此の書夙に我が國に傳はり、學者愛讀す。然れども大部の書物なるを以て、漢學を專攻する者にあらざれば、讀了すること能はず、且勿論漢文の事なれば、初學の者には甚だ解しがたし。因つて今本紀、世家、列傳の中より、最も趣味ある諸篇を鈔録して之を和譯し、初學の者をして容易く漢文を理會せしめんが爲、此の書を著せり。

此の書の仕組は、予が近頃著せる外史鈔解と同一なれば、先づ最初に譯文を讀んで、其の事蹟を知り、然る後卷末に載せたる漢文を讀むべし。但し譯文は一つには漢文の意味を充分に理會せしめんが爲、又一つには興味を添へんが爲、特に敷衍して書き綴れり。譯文中、を附せざ



る部分即ち是れなり。又、を附したる部分は、大要漢文に適當する所なれば、漢文を讀む際、宜しく参照すべし。

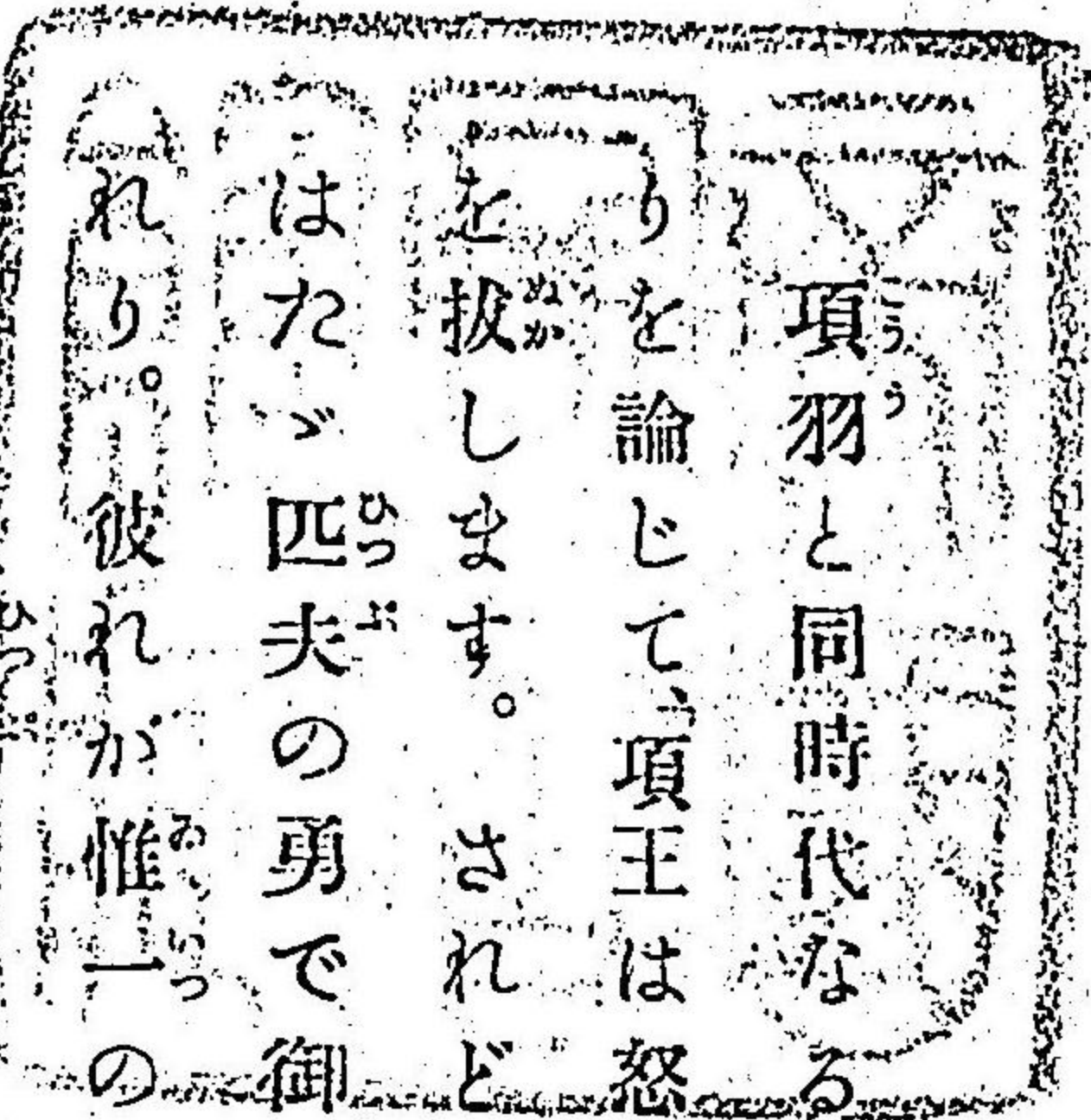
秋山四郎識す

因にいふ、本紀は天子、世家は諸侯、列傳は人臣の傳記なり。かく區別して、毎篇の終に太史公曰くとして、其の人物時勢等につき、評論を下せり、之を贊といふ、贊は稱贊の義なり。又司馬遷は太史令の官たりしかば、自ら號して太史公といへるなり。

史記 項羽

秋山四郎

肯綮



項羽と同時代なる韓信が、始めて漢王に謁せし時、項羽の人と爲りて論じて、項王は怒氣を懷いて、一度叱咤すれば、千人の敵が、皆腰を抜します。されども賢將に打任すことが出来ませんから、これはたゞ匹夫の勇で御座いますといへり。此の評論よく肯綮に中れり。彼れが惟一の參謀官范增にすら見限られて、失敗に終りたるは、全く匹夫の勇を恃として人を用ふる度量なかりしが爲なり。併しながら兎に角二十四歳にして兵を起し、八年の間七十餘戰して、一時は西楚の霸王と爲りしが、武運拙くして垓下の一戰に花々



精彩きつぱ  
り際立つ  
て、あやもや  
うあること。

しく討死したる所、いかにもキビくとして男らしき男なり。今  
史記の項羽本紀の中、最も精彩ある所を拙き取つて、彼れが一生の  
歴史を語らん。

季父末のな

項羽は名を籍といひ、下相縣の人にして、羽は其の字なり。初め起れ  
る時、年二十四、其の季父を項梁といふ。項梁の父は項燕といひ、楚の將  
にして、嘗て秦と戦ひ、秦の將王翦に戮されし者なり。項氏は世々楚の  
將と爲り、項に封ぜらるる故に項氏を姓とす。楚は秦に滅され、項燕は王  
翦に戮されぬ。されば秦は項羽よりいへば、之を公にしては祖國の仇

之を私にしては祖父の敵、其の怨骨髄に徹し居れば、必ず報復して鬱憤  
を晴さんとせり。

項羽少き時書を學べり。不器用なる彼れはいかに刻苦すればとて  
字體を爲さず、果は面倒なりとて之を罷む。又嘗て劍術を學びたるが、  
是れも物に成らざりき。親代りに彼れを監督せる項梁は、彼れの何事  
をも學び得ざるを怒つて叱責しけるに、彼れは傲然として

「書は姓名が書ける位で澤山です、又劍術は一人を相手とする業で、學  
ぶには足りません。同じ學ぶなら萬人の敵を相手にする事を學び  
たう御座います。」

それならばとて、項梁彼れに兵法を教へけるに、是れは彼れが氣に入り  
たりと見え、大に喜んで學びけるが、是れも略其の大意を知れるのみに  
て、終まで勉學することは肯はざりき。



此の一事を見ても、彼れがいかなる性格なりしかを知るに足らん。彼れは區々として一技一藝を修むることを好まず、大言壯語して人を驚かし、自ら得々たる者なり。是れ獨項羽に限らず、英雄の玉子には往此の如き傾向あるものなり。されどもこは英雄の缺點にして、英雄の英雄たる美點は別に存するなり。然るに思慮分別の未だ定らざる青年諸君の中には、動もすれば其の缺點のみを學んで、英雄を氣取り居る者あれども、こは大なる誤なり。諸君は書も學ぶべし、劍術も修むべし、今の學生が文弱に流れて身心共に健全ならず、其の甚だしきに至つては、年に不似合なる厭世悲觀の念に驅られ、可惜一生を誤る者あり、是れ世の識者の大に憂ふる所なり。劍術にまれ、柔術にまれ、充分に修めて筋骨を鍛ふると共に元氣を旺盛にして、他日世に立ち大に爲すあらんことを期待せざるべからず。又今の學生が他の諸學科の出来る割

合に、書の拙劣なるは世人の一般に認むる所なり。自らは項羽を氣取る積ならんが、書の拙劣なるは一生の損なり。上手にならずとも、せめて、蚓の廻轉、金釘流だけは免るゝやう心掛けられたきものなり。我が天皇陛下には「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」と宣へり。學を修め業を習ふは青年諸君の責務なり、努力怠るべからず。

項梁嘗て人を殺し、項羽と共に仇を吳中に避けたり。かくて吳中の賢士賢大夫といはるゝ人々と交りけるが、其の人物遙に項梁の下に出づれば、項梁は他所より來れる流浪の身にありながら、いつとはなしに彼れ等が上に立つて、凡ての出來事を指揮することゝはなりぬ。吳中の人民が夫役を課せられ、又は葬式など執行ふ爲、多人數集合する場合には、項梁常に人々に推れて首領と爲り、これが指揮監督の任に當れり。其の時陰に兵法を以て賓客及び青年を組分して、それらの役を命じ、



其の働き振を見て、人々の賢愚を察せり。是れ他日事を擧ぐる時の準備とは後に至つて知られたり。

秦の始皇帝嘗て會稽に遊び、浙江を渡れり。始皇帝天下を一統して、其の威四海に振ひ、今巡遊してこゝに至れり。鹵簿の盛大なりしは果していかん、想像にも及ばざる所なり。項梁、項羽と共に路傍に立つて之を觀て居けるが、項羽突然口を開いて、

「彼れ取つて代るべし」

と絶叫せり。項梁周章て、其の口を掩ひ、

「妄りな言吐くな、一族皆殺にされるぞ。」

叱りは叱りたるが、此奴常人にあらずとて之を怪みたりとぞ。

項羽は身長八尺餘、力能く鼎を扛げたりといふ。我が國の有名なる

大男大砲にても身長六尺四寸四分なれば、項羽はそれよりも尙ほ高き

こと一尺五寸餘なり。而して此の鼎といふものは、非常に重き物と見え、重き物といへば、いつも引合に出さるゝなり。此の大々的巨漢にして、無雙の大力なる上に、才氣人に過ぎたれば、吳中の青年輩、皆彼れを畏れ憚つて、孰れ一人抵抗する者あらざりき。

二

秦の始皇帝天下を一統し、戦勝の威を藉りて暴政を行ひしかば、全國の人民之を苦み、隙もあらばと窺ひ居たり。果せるかな始皇帝崩じて、一杯の土未だ乾かざるに、秦の二世皇帝の元年七月、項羽時に年二十四、第一番に叛旗を掲げしは陳涉なり。陳涉大澤の中に起るや、否や四方

一杯の土  
一すくひの土  
といふ事に  
て、みさぎに



の土といふ義なり。

響ひびの聲こゑに應こたずるが如ごとく、我われれ後のちれじと蜂はち起きして、其そのの形勢けいせい容易よういならず。

其そのの九月くわいげつ、會稽かいけいの守しゅ殷いん通つう項けい梁りやうに謂いつて曰いく、

「どうぢや、今日の形勢は。君が知つての通り江西の地方は皆反いた。此のやうに期せずして諸方一度に亂の作るといふのは、つまり天の秦を亡す時が到來したといふものだ。私が聞いて居るには、先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人に制せらる」といふ事だ。私は秦の祿を食んで居る小役人ぢやあるが、到底秦は駄目ぢやと思ふから、私も兵を起して、君と桓楚とを將として同心戮力して、一仕事やつて見やうと思ふが、どうぢや、同意せぬか。」

此の時桓楚は逃亡して大澤の中に居れり。項梁聲を潜め、

「賛成です、御同意いたします。併し今仰せの桓楚、あれは近頃逃亡いたしまして、何處へ参りましたか、孰れも其の居場所を知つて居りませぬ。」

せん。がた、獨私の蝻の籍が知つて居ります。それ故先づ彼れを呼んで参りませう。」

項梁席を起つて外の方へ出で行きけるが、程經て項羽を伴ひ來り、何か耳に口寄せて私語き、之を誡めて劍を持つて屋部の外に待たせ置き、自分自分は再び入つて守と對坐せり。

「それでは籍を連れて参りましたから、どうかこゝへ呼び入れて、御沙汰を受けて、桓楚を召させるやうにいたしました。御座います。」

「承知いたしました。」

項梁殷通の許を得て、項羽を呼び入れ、須臾の間主客膝を交へて密議を凝らし居たるが、應て項梁項羽に陶して、

「行れッ！」

とたゞ一聲、項羽拔く手も見せず、電光一閃、守の頭は前に落ちたり。項



印綬 綬は印のヒモ、印綬は官吏が拜命の時、印を賜はるもの。

梁其の頭を持ち、手早く守の印綬を取つて、之を佩ぶ。門下の人々大に驚き、上を下へと擾亂せり。「狼藉者逃すな」と呼はり、四方八面より打つて蒐るを、項羽「小癩な真似して、二つない命を失すな」といひさま、右に左に切り捲り、瞬く間に八九十人、又は百人近くを斬殺せり。此の勢に皆々辟易し、懼れ伏して起ち向ふ者あざりき。  
項梁乃ち故より知れる豪強の官吏を召し集め、大事を起せる譯を説き諭して、之を味方に付け、それより吳中の兵を擧げ、人に命じて會稽郡の治下に屬する諸縣の兵を收めさせて、精兵八千人を得たり。  
項梁吳中の豪傑を部署して、或は兵に將たる校尉と爲し、或は敵情を偵察する候と爲し、或は軍政賞罰を主る司馬と爲して、皆それづくに任用せり。然るにたゞ一人用ひられざる者あり。  
「どうか私にも何かの御用を仰せ付けられたら御座います。」

「イヤ、君は先頃某の葬式の時、某の事を御頼み申したに、一向役に立たなかつた、それで用ひないのです。」  
衆此の言を聞き、項梁が眼識の高きに敬服せり。是に於て項梁自ら會稽の守と爲り、項羽は副將と爲り、會稽郡の治下に屬する諸縣の人民を撫徇して、先づ根據地を作れり。

撫徇 撫はなでし、徇はたがへる。

其の後項梁八千の兵を率ゐて江を渡り、西の方秦に向つて發向せり。途すがら陳嬰、黥布、蒲將軍などいへる一方の首領共の兵を并せ、總軍合せて六七萬と爲れり。例の陳涉は第一番に叛旗を掲げたる程あつて、一時は陳王と爲り、諸將皆其の旗下に屬して、項梁も亦其の指揮を仰ぎ居たるが、戰敗れて其の御者に弑せられぬ。項梁之を聞き、諸將を召し集めて薛に會し、善後の策を講ぜり。此の時沛公も亦沛より起つて來會せり。此の沛公は後に漢王と爲り、漢の高祖と爲れる人にして、項羽



と覇を争ひたる豪傑なり。

三

經綸 なまむ。

こゝに居鄴の人に范増といへる偉人ありき。當年積つて七十歳素より仕官を好まず家に居て老の身を養ひ居けるが、生來奇計を好み、人もわらば天下を經綸する大策を授けんものと思へり。陳王敗れて項梁これが善後の策を講ずと聞き、薛に往いて項梁に説いて曰く、「私はな、貴君に善い事教へて上げやうと思つたので御座る。教へて貰う氣があるなら教へて上げやうがどうです。ナニ、教へてくれ、それなら教へて上げやう。あの陳勝ですな、あの方が失敗

されたのは固より當然の事です。何故といふに秦は六國を滅した、いづれ滅される位だから皆抵抗した、が其の中楚は最も罪がないのです。それぢやに懷王が誑されて秦に入つて再び反つて來られなくなつた爲、楚の人は今でもお可憐な事したといつて、秦を怨んで居るです。それぢやから楚の南公といふ陰陽師が豫言した事が御座る、楚は僅三軒ばかりの人数でも、秦を亡す者は屹度楚である。然るに今陳勝が軍を首めて、楚の後を立てないで、自分で王と爲つたのは失錯でした。それだから勢長くは續かなかつたのです。今貴君が江東から起つた所が楚の蜂起した諸將が皆先を争つて、貴君に隨従しました。是れはつまり貴君が世々楚の大將の家柄の人だから、屹度復び楚の後を立てるに相違ないと思ふからです。ですから何んでも楚の後を立て、人心を收攬するといふ事が一番肝要です。



此の事を教へて上げやうと思つて態々參つたので御座る。」

「御老體の御教訓、慥に腑に落ちました、其のやうにいたしませう。」

遺棄わすれ  
がたみ。

項、梁、范、增の言を用ひ、楚の後を立てんと思ひけるが、亡國の遺棄之を求  
むれども容易には得ず、辛うして楚の懷王の孫の名を心といへるが、落  
魄して民間にて人の爲に羊を牧ひ居るを見出して、之を立て、楚の懷  
王と爲せり。こは楚の人々が懷王々々といつて慕ひ居る爲、人民の希  
望に従つて、かくは名づけたるなり。されども此の命名甚だ奇妙なり、  
何となれば懷王は諡なり、諡は我が國にていへば戒名なり。何々院と  
か何々院殿とかいふに同じ。死にたる孫に祖父の戒名を付くるすら  
奇妙なるに、況して現在生きて居る孫に祖父の戒名を付くるなどは豈  
滑稽ならずや。されども、兎に角之を楚王として一時は人心を收攬せ  
り。陳嬰は楚の上柱國と爲つて、五縣に封ぜらる。上柱國は上卿の官

にして、我が國ならば大臣といへるが如し。かくて盱台といへる所に  
都を奠め、陳嬰は王に従つてこゝに留り、項梁は自ら號して武信君とい  
ひ、兵を率ゐて出陣せり。

四

數月の後、項梁、秦の軍を東阿に破り、それより西北の方定陶に至り、再  
び秦の軍を破れり。此の時項羽等一支隊を率ゐて離丘に至り、是れも  
亦秦の軍を破つて、秦の大將李由を斬れり。此の如く各方面勝利に重  
ぬるに勝利を以てせしかば、項梁益々秦を輕んじ、驕慢の氣色自ら面に  
現れぬ。



こゝに故楚の令尹即ち主相の位に立つて、一國の政治を主宰せし宋義といへる人ありき。此の人今は項梁を助けて共に陣中に在りしが、項梁の餘りに敵を輕んずる風あるを見て、之を諫めて曰く、  
 「軍に勝つて大將が驕り、兵卒が惰る時は、必ず敗れます。今兵卒が少し惰つて居るやうに見受けられます。然るに秦の兵は日々に益して参りますから、餘程御注意なさらぬといけません。私は貴君の爲に大に之を心配いたします。」

辭令ことば  
つひ。

元項梁の驕れるを諫めしものなるが、今兵卒が少し惰つてといへるは、辭令の巧なる所にして、婉曲に諷したるなり。項梁も其の意は覺りたらんが、戦勝に酔へる彼れは、折角の忠言も馬耳東風更に聽入るべき氣振もなく、宋義をして齊に使せしむ。こは先に數々使を以て齊の兵を趣し、與に俱に西せんと思ひしに、齊は兵を發して楚を助くるを肯はざ

りしかば、之を督促せしめんが爲の使なりけり。

宋義は後髪引かるゝが如き思ひにて出で行きけるが途中にて齊の使者高陵君顯といへる人に遇へり。宋義聲を掛け、

「是れは高陵君殿、お久振で御座る。相變らず御健勝で……時に貴君は武信君に御會見の爲、御出掛で御座いますか。」

「さやうで御座います。」

「さう申しては自分の國の大將を悪くいふやうですが、私が試に武信君の軍を評論して見ませば、あれは近き將來に於て屹度敗れるに相違御座いませぬ。それですから貴君が成るたけ徐にお行きなされば、傍杖に中つて死ぬやうな事は御座いませぬが、もし急いで行くとい禍を蒙りますぞ。」

宋義の豫言果して適中せり。秦は悉く兵を起して之を大將章邯の兵



に益し加へたり。章邯生兵を得て勇み立ち楚の軍を撃つ。大に之を定陶に破り項梁戦歿せり。

五 章邯已に項梁の軍を破り楚の兵は憂ふるに足らずとて今度は河を渡つて趙を撃つ。王離、沙間、蘇角の諸將は趙の城鉅鹿を包圍し、總大將章邯は其の南に陣取り甬道を築いて前軍に糧食を輸送せり。甬道は敵の掠奪を恐れ堅固なる牆を築いて街巷の如くし、其の中を行路と爲すものなり。こゝには懷王、定陶の敗軍、項梁の戦歿を聞いて大に恐れ、盱眙より彭城に之を遷し、こゝに駐屯せる項羽等の軍を并せて自ら之

項羽の戦

れが將と爲れり。項羽曰く、初め宋義が途中に遇へる所の齊の使者高陵君顯楚の軍中に在りけるが、項羽懷王を現きて宋義を褒め曰く、私に先日此方へ参ります途中、宋義殿に御目に掛りましたが、其の時わの方が武信君の軍は近き將來に於て此度敗れるに相違ない。申されぬは先だ敗れ、其の後四五日経ると果して敗れぬは、兵が是れ戦はな先だ敗れ、路徴を見出すといふは、餘程兵法を知つて居られる者で、おそれば出来ぬ。御座います、實にわの方が偉か



上將軍と爲し、項羽をば魯公と爲して之を次將と爲し、范增をば末將と爲して趙を救はしむ。其の他の各支隊の將は皆宋義に附屬し、宋義を號して卿子冠軍と爲せり。卿子は其の當時の尊稱にして猶公子といへるが如し、又上將軍は一軍に冠たるより冠軍とはいへるなり。宋義は一躍して上將軍と爲り、其の得意想ふべしと雖も、此一舉は懷王の失錯なり。縦ひ先見の明ありしにもせよ、議論の機宜に適したるものありたるにもせよ、俄に之を上將軍として、其の下に軍功ある項羽を置きたり。項羽の不平果していかん、内曲喧嘩の起るは火を賭るよりも明なり。

無事に立つる能はざるを歎  
 驍肉の歎

卿子冠軍全軍を統率して出陣し、安陽に至つて、に留ること四十日、更に進軍せんとは爲ざりけり。勇氣勃々たる項羽驍肉の歎に堪へず、忽ち一場の議論を生ぜり。項羽曰く、

くこと。

「下官が聞いて居りますには、秦の軍が趙王を鉅鹿城に包圍して、息をもつかせず攻め立て、居るさうです。疾く兵を引いて河を渡つて、楚が敵の背面を撃つて、趙が内に應じて、内外から挾撃にしたら、秦の軍を破ることは屹度です。」

宋義は項羽が己れの深謀遠慮をも察せず、差出口したるが瘡に障りたりと見え、

「イヤ、さうでない、牛に集つた蝨を搏つ時は、これに全力を注がねばならぬ。蝨を搏つと共に毛の中に食ひ込んで居る蝨まで一所に殺さうとすると、力が費えるばかりで、功がない。秦は我れ等が當の敵で、蝨だ、章邯等は蝨だ、蝨は捨て、置いて蝨を遣付けなくてはならぬ。今秦が趙を攻めて、秦が勝つたにしても、隨分骨が折れるから、兵が罷れるに相違ない。其の罷れて、敵れた所を我が軍が引承けて、之を相



手として戦つたら、譯もなく破ることが出来る。もし文秦が勝たな  
 かつて、豫定の退却を始めたなら、其の時我が軍は之を追撃して西へ  
 向つたなら、破竹の勢で秦を取つて仕舞ふ事が出来る。それぢやか  
 ららへは先づ秦趙の二國に圍はせて置いて、どちらが高處の見物と  
 洒落込むのが利口の人の爲る事である。貴下は私かたへ留つて  
 居るのを見て、えらう憤慨されるやうだが、此のやうな深い考が  
 あるからである。一體全體堅い兜や鎧を身に着けて、鋭い刀を提げ  
 陣頭に立つて三軍を指揮する事は、それは私は貴下に及ばない。  
 ぢやが籌を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するのは、それは御  
 氣の毒ぢやが貴下は私に及ばないで、  
 項羽は憤然として坐を起せり。宋義直に命を軍中に下して、  
 猛きて虎の如く狼れるを羊の如く貪るを、狼の如く強ひて

項羽の怒り  
 宋義の策  
 項羽の計

使心からさる者は皆之を斬りか。  
 と爛れ廻せり。是れいふまでもなく、正しく項羽を指斥して、虎狼に喩  
 へたるなり。さらぬだに不平満々たる項羽が議論に打負けて忿懣に  
 堪へざる折柄、此の風詆の命令を見て、何とて忍び得べき。果ては一場  
 の悲劇を演ずるに至れる。是非なき次第なれ。宋義は其の子の宋襄を齊に遣はして、齊の宰相を爲さんど、之を見  
 送つて無鹽に至り、盛大なる送別會を開けり。此の時天寒くして大に  
 雨ふり、士卒は皆飢を凍えて、最に慄れなる有様なりき。項羽部下の者  
 に謂つて曰く、  
 我々は將に力を戮せて、急に秦を攻めやうとするのに、このまでも滯  
 留して居て進まない。今歳は饑饉歳で、人民が食窮して、士卒が芋や  
 菽を食つて、僅に命を繋いで居る有様で、陣中には現在の糧食といふ



社稷の臣は猶國家の安危に關係する重臣に如し。

ものが少しもない。それであるのに、驕を極めた宴會を開いて、飲み食ひに耽るとは何といふ事だ。兵を引いて河を渡つて、趙の食に因つて、趙と力を并せて、秦を攻めやうとは爲ないで、敵の罷れて、敵を取つて、仕舞ふに相違ない。趙が取られて、秦が彊かつたら、なんで敵れた所を引承ける事などが出来やう。其の上、我が楚の兵は近頃大敗北を取つたから、大王にも御痛心の餘り、國內の兵を悉く出して、之を將軍の手に屬けられた。實に國家の安危此の一舉に在りといふ場合である。それであるのに、今將軍は飢ゑ凍えて居る士卒をば、恤へは爲ないで、己が子の身の上を案じて、之を齊の宰相とするなどは、私を徇むといふもので、社稷の臣でない。

項羽宋義の失を列舉して罵倒しけるが、其の怒尙收らざりしと見え、明くる朝、夜も未だ明け離れぬに、項羽上將軍宋義の陣營に至り、謁見を乞へり。宋義は帳の中に在つて、夢現に項羽と聞いて大に驚き、跳起さんとする隙もあらせず、項羽飛び蒐つて一刀の下に斬殺せり。項羽直に命を軍中に出し、

宋義齊と謀つて楚に反す。楚王陰に羽をして之を誅せしむ。

此の命令は素より楚王の命を矯めたるなり。されども諸將皆懼れ服して誰れ一人忤ふ者なく、口を揃へて、

「最初楚の國を立てた者は、閣下の御家で御座います。其の閣下が謀叛を企てた亂臣を御誅伐なされたのは當然の事で、何も不思議は御座いません。」

今が今まで宋義の恩願を受け居りし人もありたらんが、腰拔の弱蟲共



何とて項羽は齒の立つべき阿容と服従して共に項羽を立て、假の上將軍と爲せり。項羽人をして宋義の子を追はしむ。齊の國にて漸く追ひつぎ之を殺せり。又桓楚をして一五二什を懷王に報告せしむ。懷王は己が選抜して上將軍に任せる者を世はれていかに忿懣せるか測るべからず。されども是れも亦罪を正す力なく、其の儘項羽をして上將軍と爲さしめ、當陽君、蒲將軍の諸將皆項羽に屬せり。是れより後は項羽の獨舞臺と爲つて、其の勢旭日の昇るが如き有様とは爲れり。

六

項羽已に卿子冠軍を殺して、其の威楚國に震ひ、其の名諸侯に聞ゆ。

甑 飯を蒸す  
て器具、瓦製に  
り、底に穴あり、  
即ち蒸籠  
なり。

項羽乃ち當陽君、蒲將軍を遣はし、卒二萬を將んで河を渡り、鉅鹿を救はしむ。されども戦利少く、秦の兵を支へがねたり。趙の將陳餘使を遣はし復た兵を請ふ。是に於て項羽全軍を率んで河を渡れり。渡れる船は悉く之を沈め、釜や甑は悉く之を破壊し、今まで宿舍と爲し居たる人民の小屋は悉く之を焼き拂ひ、三日間の糧食を携帯せしめて、決死隊を組織し、士卒に必ず死して一人も還る心なかるべしとを示せり。是れ項羽が一舉して趙を救はんとの作戰計畫にして、韓信が背水の陣と同一の方略なり。

項羽趙に至れば直に秦の將王離の軍を包圍し、秦の軍と遇ひ、九度戦ひ、其の甬道を絶ち切り、大に之を破り、蘇角を殺し、王離を虜にす。涉間は楚に降らず、自ら焼殺せり。是の時に當り、楚の兵諸侯に冠たり。是れより先き諸侯の軍の鉅鹿を救ひに來りし者數多ありしが、秦の兵



を恐れて、たゞ十餘箇所に壘壁を築いて之を守れるのみにて、敢て兵を縦つて趙を救はんとする者はあらざりき。楚の秦を撃つに及び諸將皆壁上より之を觀望せり。楚の戰士一以て十に當らざるはなく、楚の兵の喚き叫ぶ聲天地を震動しければ、諸侯の軍人々惴恐せざるはなかりき。

項羽已に秦の軍を破り、諸侯の將を召見せり。諸將軍門に入りけるが、戰慄ぎ恐れて、歩むこと能はず、膝行して前まざるはなく、敢て項羽の顔を仰ぎ視る者なかりきとぞ。項羽是れに由つて始めて諸侯の上將軍と爲り、諸侯皆項羽に屬せり。

初め楚の懷王宋義を上將軍と爲し、項羽を次將と爲して趙を救はしめし時、沛公をして西の方地を略して關中に入らしめ、諸將と約して先づ入つて關中を定めたる者は、關中の王と爲さんといへり。關中は即

慄悍 短氣にして荒々しきこと。  
懷柔 なつける。  
弁髦 弁は冠の名、髦は童子の垂髦、加冠の禮に、先づ弁を加へ、後に弁と髦とを棄つ。故に無用の裝飾物といふ。

ち秦の都咸陽の所在地なり。故に秦の都を撃破つたる者は、其の賞として其の地に封じ、關中王と爲さんとの意なり。此の時秦の兵猶未だ強かりしかば、諸將關に入ることを欲せざりしが、項羽は秦が項梁の軍を破れるを怨み、奮つて沛公と共に關に入らんことを願へり。されども項羽は人と爲り餘りに慄悍にして、秦の人民を懷柔するに足らず、之れと反對に沛公は寛大の長者なれば、懷王獨沛公を遣はして項羽の願は許さざりき。されども項羽は懷王を視ること猶弁髦の如し、其の命令の如きは何とも思はざれば、既に趙を救ひたる後、直に西の方關中に向つて進軍せり。







は、結局關中へ討入つて、士卒等にも大功を立てさせんと思ひ居りしものなるに、今其の功を人に奪はれたれば、先づ士卒を饗應して英氣を養ひ、然る後其の腹愈に沛公を撃つて仕返なさんと思へるならん。此の時に當り項羽の兵は四十萬、戲水の西なる新豐の鴻門に在り、沛公の兵は十萬、霸上に在り。其の兵力遙に懸絶す。沛公の危急に瀕する狀、想見するに難からず。范增項羽に説いて曰く、

沛公は山東に居られた時は、財貨を貪り、美人を好み、目前の快樂に耽つて居ましたが、今寶の山に入りながら財物は一も取ることなく、婦女は一人も愛することなく、其の志小に在らずです。且私は人に命じて彼れが居る所の上に、自然と立上る氣を望ませました所が、其の氣が皆龍や虎の形を爲して、而も五色の色を成して居るさうですが、此れは天子の氣です。天子と爲る人には、此のやうな氣の立つもの

です。それぢやから捨て、置けば終には彼れが天子と爲るに相違ない。今の内に早く撃つてお仕舞ひなさい。此の機會を失つては、いけませんぞ。

楚の左尹項伯は項羽の季父にして、留侯張良の舊友なり。張良此の時沛公に従へり。項伯夜馳せて沛公の軍に之を私に張良に會ひ、具に事情を告げて、張良と共に逃げ去らんと爲せり。

君、傍杖に中つて沛公と俱に死ぬのは、馬鹿らしいぢやないか。僕もこんな内情を、敵方の君に知らせたからには、かうしては居られない。サア、一所に亡げやうではないか。

それは御深切誠にありがたい。だが、僕は主人の韓王に言付かつて、沛公を送つて來たのだ。其の沛公が今危急の場合に臨んで居るのに、知らぬ顔して亡げ去るのは不義だ。是れは沛公にお知らせしな



くちやならん。」

張良入つて具に沛公に告げたり。沛公大に驚き、

「それは大變な事だ。どうしたらよからう。」

全體誰れが大王の爲に關門を距ぐ計を爲たのです。」

鮒生 鮒は姓なり。

「ナニ、あの鮒生、あれが私に説くには、關門を距いで諸侯を内れなけりや、秦の地は盡く我が物と爲つて、關中の王と爲る、ことが出来る」とい

ふから、それもさうかと思つて……」

大王は大王の士卒の強弱や多少を料つて見て、それで項王に敵對が

出来ると思ひますか。」

沛公や、暫く默然たりしが、

「とても及ばない。マア、そんな事はどうでもよいとして、差當りどう

したらよからう。」

「それぢや今一遍項伯に會つて、沛公は決して項王に背きは爲ないといふことを申しませう。」

君は項伯とどういふ縁故があるのか。」

秦の時代に私と一所に始終遊んで居たのです。處がある時彼れが

人を殺しまして、捕はれさうになつたのを、私が隠匿つて活してやり

ました。それです。だから今危急な場合に臨んで、わざと知らせに來

てくれたのです。」

「君とどちらが年上か。」

「私より年上です。」

「さやうか、それなら私の爲に、さへ呼び入れてくれ、私は兄として彼

れに事へることが出来るやう。」

張良出で、項伯の辭ひを聽かず、強ひて呼び入る。項伯止むを得ず入

る。

史記鈔解 項羽

三五



つて沛公に見えければ、沛公扈に酒を満たし、之を項伯の前に進めて、壽を爲し、應て婚姻を取結べり。かやうにして先づ項伯を味方に付け、私に關に入つても、少しも自分の身に近づけた所の物はありませぬ。私事は決していたさぬ。秦の官吏や人民は、其の人口を取調べて、之を帳簿に記し、金倉武器倉を封印して、そして將軍の御出でを待つて居ました。彼の將を遣つて關を守らせたのは、物騒の世の中であるから、盜賊の出入やら非常やらに備へんが爲で、たゞ、日夜將軍の御出を望んで居つたのです。なんで將軍に反させよう。どうか伯には私が決して將軍の恩德に倍くやうなことは爲ないといふ事を具に申し上げて下さい。

沛公は口前の好き人なり、口と腹とは大なる相違あり。されども項伯も亦敵の大將と婚姻を内約せる程の腹黒き男なり。沛公の依頼を承

諾して、沛公にいへるやう、

「兎に角明日の朝蚤く御自分で御出でに爲つて、項王に御謝罪なさるが宜しう御座いませう。」

承知しました。

是に於て項伯復た夜去つて項王の軍中に至り、具に沛公の依頼の言を傳へて、尙己が意見を述べて曰く、

「沛公が先づ關中を破らなかつたなら、公がさう容易く討入ることは出来なかつたでせう。今人が大功を立てたのに、之を撃つのは不義です、それぢやに因つて善く之を待遇するが宜しう御座いませう。」

項王之を承諾せり。沛公翌朝百餘騎を從へ、鴻門に來つて項王に見え、謝して曰く、

「私は將軍と力を戮せて秦を攻めまして、將軍は河北に戰つて、私は河



南に戦ひました。併しながら私が先に關中へ討入つて秦を破つて復び將軍にこゝで御目に掛らうとは自分ながら思ひ掛けませんでした。將軍と私とはかやうにお親しい中であるのに、今誰れだか水を注す小人があつて將軍と私との間に中違させやうと爲ました。不埒な奴で御座います。それは貴君の家來の左司馬曹無傷が云々といつたから、それで私が怒つたのです。さもなくば私だつて何で貴君を撃たうとまで感情を害ふものですか。

項王沛公を留め、即日宴を開いて酒を飲み。こは中直の酒宴なり。項王項伯は東に嚮つて坐し、亞父は南に嚮つて坐せり。亞父は范増なり。項王范増を尊敬して父に亞ぐ人と爲し、常に「亞父々々」と呼べるより起れる號なり。沛公は北に嚮つて坐し、張良は西に嚮つて沛公の側

に侍坐せり。范増數々項王に目して、腰に佩びたる玉玦を擧げて之を示せること三度に及べり。玦は裝飾品なり。其の形環の如くにして一部分缺けたるもの、玦は決に通ずれば、之を示すは意を決して沛公を殺せと誘ひたるなり。項王も其の意は覺れるならんが、決斷心乏しく、默然として應ぜざりき。

范増項王の胙甲斐なきを見るに見かねて坐を起ち出で、項王の従弟なる項莊を召し、  
「君王は實に烹えさらぬ人で困る、若席に入つて前んで壽を爲し、壽が畢つたら願つて劍舞をやつて隙を狙つて沛公を遣付けるのだ、よいかさもないと若等は皆程なく彼れに虜にせられるぞ。」  
項莊直に入つて壽を爲し、壽畢れり。

「君王には沛公と御酒宴を開かれましたが、軍中の事で御座れば、音樂



を奏すること、も出来ません。それで未熟ながら私が一つ、劔舞を御覽に入れやうと思ひますが、いかいで御座います。項王、隠謀ありとは露知らずよしと許せり。項莊劔を抜き起つて舞ふ。鞭聲肅々と歌ひたるか、衣は胛に至りと歌ひたるか、そは予の知らざる所なれども、劔光天に閃き、坐作進退節に適つて、勇壯活潑なる舞振に、満場の喝采、暫しが程は鳴も止まざりき。此の隠謀を看破したるは、項伯なり、こは一大事なりとて、同じく劔を抜いて起つて舞ふ。項莊隙を狙つて沛公に近づけば、項伯舞ひながら身を以て沛公を翼蔽ふ。張良も亦此の光景を見て、矢庭に起つて軍門に至り、樊噲を見る。樊噲、張良の顔色の只ならぬを見て、今日の有様はいかいです。危急の場合である、今項莊が劔舞をやつて居るが、常に沛公を狙つて居る。

居る。そりや大變死なば諸共である。いふより早く、樊噲劔を帯び盾を小脇に搔込んで、軍門に入らんとす。衛士止めて内れざらんとす。樊噲妨するなといひさま持つたる盾を横ざまに取直し、ヤツと一聲掛くると共に、衛士を撞いて地に仆し、韋駄天走に飛び來れり。垂れたる帷を、驚擱にして、颯と披けば、内は今しも劔舞の最中、殺氣場に充滿て、血の雨を降さんずる光景なり。樊噲西に嚮つて突立ち上り、目を瞋らして、磻とばかりに項王を疾視へたり。頭髪ザワと立上つて、天を指し、兩の毗盡く裂けたり。項伯の防衛、樊噲の侵入に、項莊終に撃つことを得ず、劔舞は事なくして終れり。項王、樊噲の無禮を見て、怒を發し、劔の柄に手を掛け、居合腰と爲つて叱責す。何者ぢや。



張良徐に對ふ。

「彼れは沛公の陪乘樊噲と申す者で御座る。」

「壯士ぢや、卮を取らせい。」

近侍の者一斗入の大卮に、波々と盛つて酒を與ふ。樊噲拜謝して起ち、立ちながら只一息にグツと飲み乾す。

「見事ぢや、肴を取らせい。」

近侍の者一つの生なる彘の肩を與ふ。樊噲持てる盾を地に覆せて、彘の肩を其の上に載せ、劔を抜いて切つて之を啗ふ。項王之を見て益々其の勇壯なるに感じ、

「壯士ぢや、今一杯飲めるか。」

「エ、飲めますと、私は死ぬことでも避けません、況して酒など何んでも御座らん。抑々秦王は虎狼に等しき暴君で、力のあらん限を盡

一斗支那の  
升目は日本の  
十分一なり  
故に彼れの一  
斗は我れの一  
升に當る。

して人を斬殺いたしましたから、天下の人が皆叛いたのです。それで懷王が諸將と約束して先づ秦を破つて咸陽へ討入つた者は、關中の王と爲さんといはれました。今沛公は第一番に秦を破つて咸陽に討入りましたが、秦の財物は少しも身に近づけず、秦の宮室は皆之を封鎖して、還つて霸上に陣取つて、そして大王の御出を待つて居られました。あの將を遣つて關を守らせましたのは、盜賊の出入と非常に備へたので、別に深い意味のある譯では御座いません。此の如く沛公は骨折つて而かも功が高いので御座る。然るに未だ論功行賞の御沙汰はなくて、反つて小人の説を聽いて有功の人を誅せんとなさる。是れは亡びた秦の跡繼と申すもので、私は大反對です。項王は既に項伯より諫められ、又沛公の辯解を聞いて、今又樊噲の正論を聞きたるなれば、心に成程と感じたるか、樊噲に對しては一言半句も



應へざりき。否、應へんと欲すとも應ふる言葉なかりしならん。たゞ「坐れ」

と命ぜり。樊噲張良の次に坐せり。坐すること須臾にして沛公起つて厠に如き、因て樊噲を招いで出づ。

沛公已に出づ、項王都尉陳平に命じて沛公を召さしむ。されども見當らざりしか、知つて見逃したるか、其のまゝ何の消息もなかりき。こ

らは沛公樊噲にいへるやう、  
「今出て来る時、暇乞しなかつたが、どうしたものだらう。」

「大行は細謹を顧みず、大禮は小讓を辭せずです、今彼れが庖丁や俎な

ら、我れは魚や豚の肉といふ有様で、既の事刻まれて仕舞ふ處でした。何で暇乞などいふに及びませう、早くお逃げなさい。」  
沛公さなりと領いて、遂にこゝを逃げ出だせり。

細行云々  
書經の旅葵の

此の大行云々の語は、大なる行動を爲す時には、些細なる謹み事は顧みるに足らず、大なる禮儀を行ふ時には、小き讓り事は辭退するに及ばずといふ意味なり。こは大事に臨みたる時の一時の權道にして、吾人が平日履行すべき常道にあらず。然るに世人往々此の語を濫用して、「君、それは餘り不謹慎ではないか。」「チアニ、構ふものか、大行は細謹を顧みずだ。」「君、それは餘り無遠慮ではないか。」「チアニ、大禮は小讓を辭せずだ。」などいつて、大行にもあらず、大禮にもあらざるに、不謹慎無遠慮をえらさうに思ふ者あれども、こは大なる誤なり。吾人が平日守るべき格言は之れと反對にて、「細行を矜たざれば、終に大徳を累はず」といふことは是れなり。矜は持つなり、惜むなり、つまり大切にすること、些細なる行爲にても之を大切ににして謹むべし、然らざる時は大徳を累はして一生拭ふべからざる汚名を蒙るに至らんとし、いふ意



味にて、小事の忽にすべからざることを教へたるなり。讀者諸君の中、樊噲の豪語に感はされんことを恐れ、こゝに一言を費す。

さて沛公はこゝを逃げ去らんとするに臨み、張良を留め置いて、項王に謝せしめんとせり。張良問うて曰く、

「大王にはこちらへ御出の節、何が御持参なさいましたか。」

「私は白壁一對と玉斗一對を持参した。白壁は項王に献上して、玉

斗は亞父に與へやうと思つたのだが、来るが早いか項王に怒られて、

出し遅れて仕舞つた。君私が爲に献上してくれないか。」

「畏りました。」

是の時に當り、項王の軍は鴻門の下に在り、沛公の軍は霸上に在り、相去

ること四十里。沛公は馬車や供に連れられたる騎兵をば、其のまゝに留め

置いて、ゴツツリと身を脱け出し、沛公獨馬に乗り、樊噲、夏侯嬰、靳彊、紀信

玉斗斗は酒  
を酌み取る器  
に於ては、玉斗  
ヤクノ類、ヒシ  
斗はそれな玉  
に於て作れるな

四十里支那  
の里は、日  
本の凡そ六町  
に當る。

等の四人、劔や盾を持つて主に従ひ、徒歩にて走り、酈山の下より芷陽に

出で、間に行かんとす。彌々出掛くる時、沛公張良にいへるやう、

酈山の下から吾が軍に至る時は、二十里に過ぎないから、直に吾が軍

まで行くことが出来る。私が吾が軍中へ行き着いた頃を見計つて、

そこで君は入つて謝してもらひたい。」

かくいひ置いて立去りけるが、暫くあつて軍中に至れり。張良時刻を

測つて奥へ入り、項王に謝して曰く、

「沛公には大層に頂戴いたしました。御暇乞申上ぐることも叶はぬ程

酌酌いたしました。依つて私より宜しく御詫申上げてくれとの事

で御座いました。それから又謹んで手前共をして、白壁一對、これは

再拜して、大王の足下に獻じ、玉斗一對、これは再拜して、大將軍の足下

に捧げまゐらすやう申付かりまして、御座います。」



沛公はいづこに御座るか。

大王には沛公の不行届を御咎め遊ばされる思召ぢやと聞いて大に驚きまして、實は先刻身を脱け出して獨で逃げ去りました。最早自分の軍中へ行き着いた頃で御座います。

此の最後の一言は、追手を出しても駄目で御座るといふを諷示したるなり。張良いひ終つて白壁を捧ぐれば項王之を請取り、

「是れは結構な壁ぢや、ありがたう」

といひつゝ、大事さらに坐上に置く。次に張良玉斗を取つて之を亞父に捧ぐ。亞父無造作に請取つて之を下に置き、矢庭に劔を抜いて只一撞に撞破れり。

「チエー、小僧與に謀るに足りない。項王の天下を奪う者は必ず沛公だ。吾輩共今に彼れが虜と爲るだらう、残念！」

小僧原文に  
即ち小僧は通  
常項羽を斥す

と解す。然れ  
共史記書華錄  
といふ書に極  
憤る事と極  
得ず只項莊  
を罵る妙と  
爲ると又處と  
に「亦遙に語  
莊にいへる語  
と應ず」とあ  
り。此の解正  
形。木偶人形

沛公軍に至り、立に曹無傷を誅殺せり。

范増沛公の贈物を粉碎し、項莊を罵倒す。張良此の狂態を見て、いかに感じたる。恐らくは其の無禮を咎めざるのみならず、尤なりと思ひ

けん。何となれば、元來此の鴻門の會の一幕は、張良といへる智者と

范増といへる識見家とが傀儡子にして、項王と沛公とは木偶人なり。

天下の豪傑たる項王も沛公も、此の時の馬鹿さ加減、狼狽さ加減、三文の

価値もあらず、此の木偶人を使ひたる傀儡子の骨折さこそと思ひやら

るゝなり。傀儡子は肝膽相照して、互に其の苦衷を察し居れば、何とて

其の無禮を咎むべき。忠憤の迷れる所、是非もなき次第なりとて、深く

同情を寄せたるならん。



八

其の後數日を経て項王兵を引いて西の方咸陽に至り之を屠つて秦の降王子嬰を殺し秦の宮室を焼き拂へり。秦の宮室は名高き阿房宮などの大建築物なれば其の火三が月の間焼け續いて滅えざりきといふ。

かくて秦の寶物婦女を掠奪し東の方楚の國に歸らんとす。ある人項王に説いて曰く、

關中は山河を阻て、東は函谷關南は武關西は散關北は蕭關四面塞つて要害堅固の地で御座る。其の上地味が肥えて五穀豐饒で御座いますから、こゝに都を奠めて天下の霸者と爲るが宜しう御座います。

といふ。項王自ら焼いたる事は打忘れて秦の宮室の皆以に焼け失せて見る影もなき有様となれるを見又心に故郷を懐う思つて頻に國に歸らんことを思ひ居れるよりある人の勸に従はず、

「富貴にして故郷に歸らざるは繡を衣て夜行くが如きもので誰れも之を知る者がなし。それだから私はこゝに留るのはいやぢや早く歸つて故郷の人達に私の富貴を誇示してやりたい。」

ある人項王の餘りに馬鹿氣たる返答を聞いて、

「よく世間の人が『楚の人は沐猴が冠を着けたやうなものだ』といはれるが果してさうだ人の形は爲て居るが没常識だ呆れて物がいへない。」

といふ。此の惡口は當面いひたるにはあらざれども壁に耳ありの譬に漏れず忽ち項王の耳に入りぬ。短氣なる項王何として猶豫すべき大

沐猴さる楚人之を沐猴といふ。



に怒つて之を召捕り、釜煎の刑に處せり。かくて項王人を以て此の度の戦況を懷王に報告せしむ。懷王曰く、「約束の通りにいたせ。」

此の命令簡單なれども、王者の態度を示して、いかにも立派なり。されども相手が相手なり、項王の心には定めて不快に感じたるならん。懷王の禍を招きたるも畢竟此の一言が導火線と爲りたるなり。

項王上邊には懷王を尊び、義帝といへる尊號を上れり。かくして自らも王と爲らんと欲し、先づ諸の將相を王とせり。其の言に曰く、「最初兵を天下に起した時、假に諸侯の後を立て、秦を伐つた。併し是れは一時の權謀といふもので、實際鎧を着て、刃を執つて軍を首め、て、そして三年が間、風に櫛り、雨に沐つて、艱難苦勞して、秦を滅し、天下を定めた者は、皆將相諸君と籍との力だ。義帝などは何の功もあり

はしないが、兎に角今まで我々の王として置いたのだから、少しばかり天下の土地を分けて、相變らず王として置かうかと思ふ。諸將一言の異議を挿む者もなく、皆同意しければ、乃ち天下を分ち、諸將を立て、或は侯と爲し、或は王と爲せり。たゞこゝに最も處置に困みたるは沛公なり、項王范增、沛公の天下を有たんことを疑ひ、思へるやう「浮」と關中の王と爲さば、こゝを根據地として其の威を振ふに相違ない。が、業已に中直したるからには、謂れなく我れより兵端を開く譯にも行かない。さればといつて關中の王と爲さなかつたら、約束に負く嫌がある。そればかりではない、約束に負いたら、王命に従はざる不屈者よといつて、諸侯が我れに叛く恐がある、さて困つたものだとして、千々に心を碎きたる結果、陰に謀つて曰く、「巴と蜀とは道路の險惡な場所、て、そして秦の降服して遷された人が



皆蜀に居る。さうだ、巴蜀も亦關中の地だ、是れは妙案々々といひ、二人笑壺に入つて悦び、沛公を立て、漢王と爲し、巴蜀漢中に王として南鄭に都せしめ、咸陽附近なる眞の關中の地は之を三分して、秦の降將章邯等を封じて王と爲し、かくして漢王の押と爲したり。これは旨い考なり、之を分り易さやうに我が國に譬へていへば、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸と之れに上野、下野とを加へて、之を關東八箇國といひ、單に關東といへば、此の八箇國の地方の總稱なり。併し文字の上より附會けていへば、奥州の際涯までも關東といへば、いはるゝなり。項王范増はこゝに着眼し、文字の上より附會けて「ナア、奥州も關東だ、關東の王とするといふ約束だから關東でさへあれば、何處でもよい」といつて、遂に沛公を奥州に封じて、眞の關東の地へは秦の降將を封じて、之を沛公の押として、京都方面へ打つて出づることの出來ぬやうに仕組みた

るなり。加之奥州の片隅には秦の降參人を遷し置きたれば、此の人々は沛公に對して復讐こそ企つれ、聯合して我れに及向ふ氣遣なしと思ひ、それ故妙案々々とて打悦びたるなり。かくて項王は自立して西楚の霸王と爲り、九郡の王と爲つて、彭城に都することゝなれり。漢の元年四月、諸侯戲水の下より退いて、各々國に就きたり。項王の論功行賞の不公平なるを憤慨せる者も多かりしが、其の威に恐れて、一先四方に退き去れり。項王もこゝを出で立つて西楚へ之さけるが、其の都と定めたる彭城は、以前より義帝の居城と爲り居りしかば、先づ人をして義帝を他へ徙さしむ。古の帝王は、其の都の地が千里四方で、必ず川上に居られました。それ故陛下にも川上へ御引移が宜しう御座います。といはせて、長沙の郴縣といへる所へ徙し、趣して出で行かしむ。昨日



までも今日までも、彭城の深宮に垂れ籠めて、王と敬はれ帝と仰がれし身の、一朝項王の感情を害ひては、そこに居ることも叶はず、すこゝと郴縣さして落ち行きぬ。帝の否運に傾けるを見て、其の群臣次第々々に背き去り、帝の前途を見届けんとする者一人もなし、さても淺ましき人々かな。項王は、かばかり義帝を困めても、尙飽足らずやありけん、陰に衡山王、吳芮、臨江王、共敖の二人に命じ、終に江中に於て帝を擊殺せしめたり。項王の暴逆こゝに至つて極まれりといふべし。かゝる大罪を犯せる者、天豈之を赦さんや。一時は西楚の霸王と爲つて、生殺與奪の權を握り、全盛を極められたれども、此の一舉より天下の人心離叛して、日々に衰運に向ひ、終に滅亡せるこそ自然の數といふべけれ。爾に出づる者は、爾に反る者なり」とは、是れ等をやいふならん。

爾云々孟子  
梁の惠王章句  
下の篇。

九

漢王は他の諸侯と共に、戲水の下より退いて、一旦漢中に至りけるが、部下の將士之を厭うて途中より逃亡する者多し。漢王も亦久しく漢中に居るを好まず、韓信の計を用ひ、還つて章邯等を撃つて之を殺し、關中全部を平ぐ。

かくて彌々關中を根據地として、それより打つて出でんとするに臨み、こゝに漢王に取つて最も有利なる口實を得たり。そは項王の義帝を弑せる事是れなり。楚と漢とは到底兩立せず、何れの日にか干戈を交ふるは必然の勢なるが、此の口實を得たるは十二分の強みなり。漢王義帝の爲に喪を發し、使者を發して遍く天下の諸侯に告げしめて曰



寡人寡は少  
なり、徳少  
人といふ事  
に王者の謙  
稱なり。

天下共に義帝を立て、北面して之れに事ふ。今項羽義帝を江南に放つて之を弑せり、大逆無道いふに忍びず。寡人悉く關中の兵を發し、南の方江漢に浮んで下り、願くは諸侯王に従ひ、楚の義帝を弑せる者を撃たん。

と。出師の名正し、天下の諸侯靡然として之れに應ぜり。漢の二年春、漢王、常山、河南、韓、魏、殷、五諸侯の兵、凡て五十六萬人を部署して、東の方楚を伐つ。此の時項王、齊を撃つて未だ下すこと能はざりしが、漢王兵を出すと聞いて、直に諸將に命じて齊を撃たしめ、自ら精兵三萬人を以て南の方魯より胡陵に出づ。四月、漢の兵皆已に彭城に亂入して、其の寶物、美人を分捕し、漢王日々宴會を開き、戰勝を祝し居れり。項王己れが留守に彭城を乗取られて、寶物も美人も皆掠奪せられた。

三匝匝はめ  
ぐるなり、三  
重に取圍める  
こと。  
窳冥まつく

るより、大に怒つて西の方蕭縣より、朝駟に漢軍を撃つて、東の方彭城に至り、其の日の正午頃には、大に漢軍を破れり。漢軍潰走し、追ひ詰められて、我れも、と穀水、泗水の二つの川に飛び込めり。こゝにて漢卒十餘萬人を殺せり。又一隊の漢兵は南の方山に向つて走れり。楚の兵又之を追撃して、靈壁縣の東なる睢水の上に至れり。漢軍退却して、楚の爲に睢水に推し墜さる。こゝにても亦十餘萬人、睢水に入つて溺死し、水之れが爲に流れざりきといふ。項王僅に三萬の兵を以て一朝にして五十六萬の大敵を撃破れり。項王の武力も亦偉なるかな。

漢王散々に敗北し、殘兵を率ゐて逃走す。項王逃しはせじと追ひ絶つて、之を包圍すること三匝、漢王今は絶體絶命、逃ぐるに道なく、アハヤ自害せんと覺悟せり。然るに天道は善に與して惡を懲すか、此の時に當つて大風、俄に西北より吹き起つて、木を折り、屋を發き、砂石を揚げ、窳



冥ひとして暗夜あんやの如し。漢軍今は力盡ちからつききて手向てむかふ勇氣ゆうきもあらざりしが、此の大風おほいぜうふう漢軍に代つて楚軍しゆを迎へ、砂烟すなけむりを浴あびせ掛けられたれば、楚軍大に亂みだれて壊散くわいさんせり。是に於て漢王危あやき命いのちを繫つなぎ止め、數十騎しゆじきと共に遁のがれ去さるを得たり。

漢王沛ばいに立寄つて家族かぞへを取纏とめ、西の方關せいほうかん中に引上げんとせり。楚も亦人またひとを遣はし、漢王を追つて沛ばいに之のき、漢王の家族かぞへを捕へさせんとせり。漢王の來れる時には、家族かぞへの者皆既に亡なげ失せて、相見あひまるを得ざりき。漢王本意ほんいなくこゝを立去つて落行らくかうさけるが途中ちゆうちゆうにて、圖らずも我が子の孝惠かうけい魯元ろげんの一男一女が道に流離りゅうりへるを見て之を救ひ上げ、馬車ばしやに載せて走れり。楚の騎兵きへい漢王を追ふ。漢王追はれて危急きせきに迫れり。車の重くして進まざるに氣を苛いらだて、孝惠魯元かうけいろげんを車より推し、隨したがふこと三度さんど、馭者よしやの滕公てんこう其の度たびごとに車より下りて之を救ひ上げ、

「いかに切迫きつぱくしたればとて、そんな事して馬が驅かられませうかなんで御子ごし様を見棄みすて、行かれませう」といふ。無慈むじ悲ひの親おやに棄すてられたる二人の子も、此の情深なまじき滕公てんこうに救はれて危あやき命いのちを助たすかりぬ。

漢王父の太公たこうと夫人ふじんの呂后りよこうとを求もとむれども、いづこへ立退たのきたるか相遇あひまはず。こちらは審食しんじき其た一人ひとり、太公たこう呂后りよこうの供ともして忍しのび、く漢王を探し求めしに、漢王には遇あはで、反かへつて楚の軍きんに遇あへり。楚の軍きんにては善よき獲物えつぶつを見付けたりとて、打悦うちえつび連れ歸かへつて項王きやうわうに報告ほうこくす。項王きやうわう常に軍中に置いて、之を人質ひとぢとなせり。

此の時呂后りよこうの兄あにの周呂侯しゆりよこう漢の爲ために兵へいを將しやうゐて下邑げいに居いりしかば、漢王わんわう間まに行いいて之のれに従したがひ、追々おそおそに其の士卒ししゆを取纏とめて、滎陽しやうやうに至いたり。諸の敗軍ばいぐん漢王の所在しざんを知つて、皆こゝに來り會あせり。



關中に殘つて兵の補充糧食の輸送等を擔任せる蕭何は、此の度の敗報を得て、後詰の兵を出ださんと思ひしが、壯丁は既に悉く召集して之を戰地に出し盡して、殘れる者はたゞ老人子供のみならず、未だ兵役に傳かざる者のみなり。蕭何是れ等を驅り集めて、悉く滎陽に詣らしめしかば、兵勢復び大に振へり。

楚は彭城より起つて、常に勝に乗じて北ぐるを逐ひ、漢と滎陽の南なる京縣と索亭との間に戰へり。漢も一時は敗北せしが、其の後勢を盛り返して、屢々楚を破れり。故に楚はこゝに食ひ止められ、滎陽を過ぎて西に進み、關中の根據地を衝くこと能はざりき。

十

漢王の彭城に敗れし時、諸侯皆復た楚に與して漢に背けり。是れ漢は取つて一つの苦痛なりき。其の上に漢は滎陽に陣取り、甬道を築いて之を河水の上まで屬けて、そこに秦の時より貯藏せる敖倉の粟米を取寄せ、之を糧食と爲し居りしに、漢の三年、項王數々漢の甬道を侵して、粟米を奪ひければ、漢王糧食に窮せり。漢王兵は少く食は乏しく、到底楚に抗ひがたきより、遂に恐れて媾和を請ひ、其の條件として、滎陽以西を割いて漢と爲さんとせり。項王も漢王の容易に滅しがたきを悟りたるか、此の條件を承諾して、媾和を聽入れんと思へり。歴陽侯范增項王に説いて曰く、

漢は相手に爲易いのです、今彼れの願ひを聽いて、釋て、取らなかつた



ら、後になつて必ず悔ゆることが出来ませう」

といふ。項王此の諫を聽き、漢王の願を斥けて、范増と共に急に滎陽を包圍して攻め立てたり。漢王之を患へ、陳平の計を用ひ、陳平に黄金四萬斤を與へて、楚に反間を縱たしめ、楚の君臣を離間せり。

かくてある日、項王の使者、滎陽城に来れる時、牛や羊や豕を料理して立派に盛り上げたる饗膳を持運ばせ、之を使者の前に進めんとしたるが、漢王使者を見て驚ける真似して、

「是れは間違つた、私は范増殿からの御使者かと思つたら、項王の御使者ですか、それでは少しお待ち下さい。」

急に之を持ち去らせて、二度目に持ち出せる品々を見れば、胡蘿蔔、牛房に九面芋、澤庵の尻尾を添へたる最も粗末なる膳部なり。

「サア、御遠慮なく、澤山食つて下さい。」

「項王の使者、此の冷遇を受けて、ブン／＼と怒つて歸りけるが、歸つて一五一什を項王に報せり。昔の人は正直なりとはいへ、かゝる子供騙の計略のみにてはいかに思慮淺き項王にても騙さるゝことあらざるべし。されども先に陳平の行ひたる離間策圖に中つて、項王心に十二分の疑を懷き居れる際なれば、此の計略マンマと功を奏して、益々范増を疑ひ、漢と私ありと思へり。是れより後は范増を疏んじて、次第に其の權を奪ひ、何事も打解けて語ふことなかりけり。范増大に怒つて、  
「天下の事は、モウ大概片付きましたから、是れから後は大王御自身でなさい。私はお暇戴いて國へ歸つて元の土百姓と爲りませう。」  
項王何の慰藉をも與へず、其の願を許せり。范増一片の任俠心より七十の老軀を驅つて東奔西走し、無分別なる項王を補佐して、漸く西楚の霸王とまで立身せしめ、自分も一時は亞父と呼ばれて、信任厚かりしも



のが、一朝敵の奸計に陥つて、弊れたる履を棄つるに等しき冷遇を受けぬ。満身の不平洩すに所なく、たゞ一人悄然として立出でけるが、未だ彭城に至らざるに、疽といへる腫物背中に發して死せり。因にいふ、支那人は不平の極に達すると、疽を病むで死するもの多しと見え、此の事往々彼の國の歴史に散見す。醫學上より研究せば、不平と疽とは何か關係あるものにや。

元の薩都刺といへる人、彭城の雜咏と題して左の一詩を歌へり。

彭城雜咏

薩都刺

亞父墳前春草齊。楚王城上夕陽低。

黃鶯不解興亡事。飛過海棠枝上啼。

亞父の墳前には春の若草が一面に生えて、楚王の住はれし彭城の上には夕陽が卑く低れて居る。此の二句は范增も項王も、皆今は其の面影を留めず、たゞ墳と城とが残れるのみなりといへるなり。此の如く前置して然る後第三第四の二句に至り、黃鶯はかゝる名高き古跡の地に居りながら、漢の興つて楚の亡びたる故事も何も解せず、飛んで海棠の枝上を過ぎて、面白氣に啼いて居るといひ、無心無情の黃鶯を藉りて、興るも亡ぶも只一場の夢なりといへる感慨を述べたるなり。

十一

媯和談判破れ、漢王滎陽城を固守す。然れども糧食日々に缺乏し



て久しきを支へがたく、殆ど死地に陥りぬ。こゝに漢の將に紀信といへる忠臣ありたり。一日漢王に説いて曰く、

「長らく圍城の中に在つて、今日まではどうやら防ぎ果せましたものの、最早一日も支へがたき危急の場合と爲りました。就きましては臣大王の御身代と爲つて、楚を誑きますにより、大王には其の際にこそを落延びて、再舉を御計りなされんことを偏に願ひ上げます。」

漢王之を聞いて、感歎すること良久しく、可惜忠義の士を亡ふかと思ひ、頃には應へかねたるが、かくてあるべきにあらざれば、其の請を容れて、其の夜城中の女子二千人を驅り集めて、之れに甲を被らせ、城の東門より出だせり。「スハ、漢軍窮して打つて出でたるぞ、泄すな、打取れ」と呼はり呼はり楚軍四面より攻蒐れり。女軍こそ氣の毒なれ、瞬く間に一人残らず殺されたり。紀信天子の馬車に乗り、天皇旗を押立て、同じ

く東門より出で、

「城中食盡きて、漢王降伏す」と叫びたり。楚軍一齊に萬歳と呼ぶ。其の際に漢王も亦數十騎を従へ、城の西門より出で、成臯さして落延びたり。項王紀信を見て問うて曰く、

「漢王はいづこに御座るか。」

「漢王は已に城を脱出て仕舞はれました。」

亂暴なる項王の眼中には、忠臣も義士も見えざるか、己れを誑く不埒者として、遂に紀信を焼殺せり。無慙といふも愚なり。我が朝の村上彦四郎義光は大塔の宮の御身に代つて、吉野の城に忠死を遂げ、其の芳しき名は花と共に今に遺り、異朝の紀信は滎陽城に漢王を救つて、千載の下汗青を照す。東西揆を一にして、人臣の模範といふべきなり。

汗青 書物といふこと。



清の蔣藏園嘗て紀信の節義を欽仰し、左の一詩を賦せり。

清風店弔紀信

蔣藏園

滎陽女子出門東、黃屋輕投烈燄中。

看到韓彭盡誅醢、始知一死泰山同。

支那の旅館は何々店と稱すれば、此の清風店も恐らくは滎陽の旅館にて、こゝに宿泊して、紀信の事を憶ひ起し、此の詩を作つて弔へるならん。黄屋は天子の車なり、天子の車は黄繒を以て蓋の裏と爲す。故に黄色の屋根即ち黄屋といへば、天子の車と爲るなり。韓彭は韓信、彭越にして、共に漢の功臣なるが、後に漢王に誅せられし者、醢は肉醬なり、泰山は五嶽の一にして重きもの、譬とす。

さて全詩の意味は、漢王が窮して、滎陽城を脱け出でんとする時、女子が門東に出でたり。(東門とせざるは韻字の都合による。)かくて紀信は天子の車に乗り、漢王の身代と爲つて城を出で、項王の爲に焼殺されたり。(軽く投ずといへるは面白し、此の文字にて、死を視ること歸るが如く、平然として烈しき燄の中へ身を投じたる趣見ゆ。)此の二句にて、歴史を述べ、次に自己の感慨を披瀝せり。古來よりの成敗の跡を看て、韓信や彭越が盡く誅せられ、肉醬とせられて、全く徒死したる事を見るに到り、始めて紀信の一死は泰山と同じやうに重くして、千載の下に至るまで、人臣の龜鑑とするに足ることを知れりといひ、其の功績を述べ、之を弔ひたるなり。



十二

漢王一旦成臯に入りしが再び出で、廣武に陣取り、項王も亦こゝに來つて對陣せり。楚と漢とは長の年月干戈を交へ居れるが、其の力互角にして、勝敗未だ決せず。壯丁は軍旅に苦み、老弱は運送に罷る。項王漢王に謂つて曰く、

「數年以降、天下亂れて、人民の其の堵に安んぜざるのは、たゞ我々兩人の爲で御座る。いつまで争つても果しのつかぬ事ですから、願くは漢王と一騎打の勝負して、雌雄を決したう御座る。徒に天下の父や子たる者を苦める事は止めませう。」

漢王は龍の化身と稱すれども、腕力を以て一騎打の勝負を爲すに至つては、素より項王の敵にあらず。漢王もそれを知れる爲か、呵々と打笑

ひ斷つて曰く、

「私はどちらかといへば、智惠を鬪はすことは出来るが、力を鬪はすことは出来ません。」

旨く言拔けたり。野蠻人の力競は出来ぬが、文明人の智惠競なら御相手仕らんといへる意味、言外に躍如たり。

かくいはれては、項王自ら打つて出づること能はず。部下の壯士に命じて、一騎打の勝負せしむ。こは敢て楚漢の雌雄を決せしめんが爲にはあらず、たゞいひ出したる事を無下に後へ引くことの恥づかしさに、己が身代として出し、戦場の餘興と爲したる位のものなり。壯士は陣頭に立てり。漢は臆病にも飛道具を以て之れに立向はせたり。騎射の達人樓煩といへる者、たゞ一箭に壯士を射て殺し、繼いで出で、壯士二人まで射殺せり。



項王此の有様を見て大に怒り自ら甲を被り戟を持ちたい一騎乗り出だせり。樓煩同じく射落さんとて矢を番へざりくと引絞り切つて放たんとする一刹那項王目を瞋らして之を叱す。樓煩其の勢に辟易し目は敢て視ること能はず手は敢て發つこと能はず遂に走り還つて壁に入り敢て復た出でざりき。漢王人を以て間に此の壯士の何者なるかを問はせけるに是れなん敵の總大將項王なりければ漢王大に驚きたり。

是に於て項王自ら進んで漢王に近づき廣武の間に臨んで語れり。漢王項王の十罪を數へ上げて之を責む。項王怒つて一騎打の勝負を迫りたれども漢王聽入れず。項王悔しまざれに弩を伏せ射て漢王に中つ。漢王負傷し走つて成阜に入れり。

弩 オホユミ  
仕掛にて機械 とひ  
器を射出す武矢

十三

此の時漢は兵盛にして食多く項王は兵罷れて食絶ゆ。漢此の機會に乗じ陸賈を遣はし項王に説いて太公を請はしめしが項王肯はず。漢王復た侯公をして往いて項王に説かしむ。項王味方の形勢の甚だ振はざるを知る折柄漢の使者二度まで來つて太公を請ひければ之を好機會として自ら進んで媾和條件を提出せり。其の條件は天下を中分して滎陽の東二十里なる鴻溝といへる一の渠を界としてそれより西を漢の領分としそれより東を楚の領分とする事なり。此の條約容易く締結しければ項王侯公の請を許し即時に漢王の父母妻子を歸

父母妻子  
前に父と妻と



が腹にせられ  
しこと見ゆれ  
母も腹にせ  
られしにや  
詳ならず。

せり。漢軍皆萬歳と呼ぶ。漢王侯公の功を賞し之を封じて平國君と爲す。

項王已に媾和を約しければ兵を引き成皐の圍を解いて東に歸り漢も亦西に歸らんとせり。此の時漢の謀臣張良陳平漢王に説いて曰く「漢は天下の大半を有つて其の上に諸侯が皆附屬して居ります。然るに楚は兵が罷れて食が盡きて勢が非常に衰へて居ります。此れは天が楚を亡す時で御座います。それ故其の好機會に乗じて之を取つて仕舞ふが宜しう御座います。今之を釋て置いて撃ちません時は謂はゆる虎を養つて自ら患を遺すといふものです。遣付けて御仕舞ひなさい。」

漢王之を聽入れぬ。漢の五年漢王乃ち項王を追つて陽夏の南に至り軍を止む。淮陰侯

韓信建成侯彭越と時期を定め一所に會合して楚軍を撃たんとす。然るに漢王進んで固陵に至れるが韓信彭越の兵來會せず。楚は漢の約に背きたるを憤り頻に漢軍を撃つて大に之を破れり。漢王復た壁に入り塹を深くして自ら守れり。漢王張良にいへるやう、

諸侯が約束に従はないがどうしたものぢやらう。

楚の兵は程なく破れませう。併し韓信彭越の諸侯は名は王と爲つて居てもまだ確と經界を定めた分地が御座いません。それですから來ないのは尤です。君王には彼れ等と共に天下を分取する御積りなら立に呼寄せる事が出來ます。がもしそれが出來ませんなら天下の事はまだどうなるか知れませぬ。君王には思ひ切つて陳より東海に傳るまで盡く韓信に與へ睢陽より以北穀城に至るまで盡く彭越に與へ各をして自ら戰を爲さしめたら楚は譯もなく敗



れませう。

張良が韓信、彭越に與へんといへる土地は、即ち現在項王の領地なり。敵の領地を二人に與へんとする張良の策も亦妙ならずや。此の如くすれば、二人の者は自らの爲に否應なしに戦はざるを得ず。否應なしに戦へば、それが取りも直さず漢王の利益と爲るなり。此の獻策を聞いて、漢王善しといひ、即刻使者を發して韓信、彭越に告げしめて曰く、「力を併せて楚を撃たれよ。楚が破れたなら、陳より以東海に傳るまでは齊王に與へ、睢陽より以北穀城に至るまでは彭相國に與へん。」

齊王は韓信なり、彭相國は彭越なり。使者至つて漢王の旨を傳へければ、韓信、彭越皆對へて曰く、「早速兵を進ませう。」

いかにも現金なり、韓信は直に齊より往けり。劉賈の軍、壽春より韓信

と竝行し、力を併せて共に城父を屠つて、垓下に至れり。大司馬周殷は楚に叛き、舒の兵を以て六といへる縣を屠り、九江の兵をも舉げて、劉賈、彭越に隨ひ、皆來つて垓下に會せり。

十四

史を讀んで英雄の末路に至れば、其の悽酸卒讀に堪へず、項王が垓下に於ける悲歌、愴慨の如き、即ち是れなり。さる程に項王は壁を垓下に構へて、こゝに楯籠りしが、兵は少く、食は盡きて、漢軍及び諸侯の兵之を十重二十重に取圍み、蟻の這出づる隙もなく、進退こゝに谷りぬ。小夜深けて、射交す矢叫の聲も切結、劍の音も跡たえて、萬籟鳴を鎮めたる

萬籟 萬物の聲。



楚歌 楚人の  
謳なり 猶吳  
謳如し 漢軍  
が如し 心を  
項羽が 爲す  
人に 眞似て 楚  
歌したるに 楚  
人の 歌と思  
ふに 大に 驚け  
るなり

頃、漢軍の四面、齊しく起れるは楚歌なりけり。項王之を聞いて、大に驚

き、漢は皆已に楚を得たるか、何ぞ楚人の多き事よ。

とて、暫しが程は愁に沈みしが、急度思ひ返し、今は是れまでなり、訣れの杯酌交さんとして、やをら起つて帳の中に酒宴を張れり。こゝに一人の美人ありけり、其の名を虞といふ。項王最愛の佳人にして、江東を出でしより以降、血の雨降らす戰場にも常に具せざるはなし。又一匹の駿馬ありけり、其の名を騅といふ。一日に行くこと千里、希代の逸物なれば、項王之を愛して、常に之れに乗らざるはなし。項王彼れを思ひ、此れを思うて、悲歌、忼慨し、虞美人に命じて、起つて舞はしめ、自ら詩を爲つて、歌つて曰く、

力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝。

騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。

分は置字にして讀まず、第一句は自讚にして、力は山をも拔き、勇氣は大千世界をも蓋ふといひ、第二句は時運の不利なるをいつて、かほどの力あり勇氣ある我れも、時運の不利なるが爲、戰敗れ、今は愛馬の騅も力盡きて一步も進まずとて歎息す。第三句は上を承けて、騅は進まずいかにとも爲べきやうなしといひ、第四句は又上のいかにとも爲べきやうなしを承けて、虞美人に説き入り、虞や虞や若をいかにせばよからんと結ぶ。前は勇壯人をして神飛ばしめ、後は悲涼人をして涙下らしむ。實に千古の絶調といふべし。料らざりき書は姓名が書ける位で澤山ですといへる彼れ項王にして、此の名作あらんとは、信に英雄は測るべ

悲涼かなし  
くさびし。  
絶調すぐれ  
たるしらべ。



からざるものなるかな。

項王歌ふこと數回、虞美人も亦詩を作つて之れに和す。其の詩に云く、

漢兵已略地。四方楚歌聲。

大王意氣盡。賤妾何聊生。

漢兵已に我が地を略有して、頼み甲斐なき味方の兵共は皆敵に降り、四面楚歌の聲を聞く。大王日頃の御息込も盡き果て給ひて、御生害とならば、妾獨生長らへて何かせん、彼の世まで御供仕らんと、の述懐なり。項王此の優しく、柔順しき歌を聞いて、其の心根を不憫と思ひはらく、と落涙しければ、左右の者も皆泣いて、項王の顔を見上ぐる者たゞの一人もなかりきとぞ。

虞美人はこゝに自害を遂げたるものと見え、後人其の幽魂を慰めんとして、之を詩に歌ひたる者少からず、今其の一二を左に記さん。

虞姫墓

宋范成大

劉項家人總可憐。英雄無策庇嬋娟。

戚姬葬處君知否。不及虞兮有墓田。

劉は漢の高祖の姓、庇はかばふこと、嬋娟は美好き貌、戚姬は高祖の妃戚夫人にして、高祖の皇后呂后の嫉を受け、賜殺にせられし人、墓田は墓や墓に附屬する田地なり。さて全體の意味は漢の高祖と楚の項羽との家人は總て憐むべきものなり。兩雄とも軍にかけては神變不可思議の策を施せども、己が愛する美人をかばうことに就いては、何の策も



なく、共に無慙の最期を遂げしめじこそ遺憾なれ。併しながら同じく無慙の最期を遂げしとはいへ、戚夫人を葬れる處は今いつこにありや、恐らくは知る者一人もあらざるべし。さすれば虞美人の墓田が今に至るまで存在し、居るには及ばずといひ、暗に其の節操を賞揚せるなり。

虞姬

明朱靜菴

力盡重瞳霸氣消。楚歌聲裏恨迢迢。

貞魂化作原頭草。不逐東風入漢郊。

重瞳は二つ重りたる瞳子なり。項羽の目は重瞳子なりしとして項羽の異名と爲せるなり。迢々は迢遙なり、永く續いて絶えざる意味。貞魂云々の一句は、虞美人が死して血が原野を染めけるに、其の血が化し

て草と作り、之を虞美人草といふといへる古諺あるより、かくはいへるなり。血といはずして貞魂といへるは、血の草と作るは畢竟魂の作用に由るものと見たるが爲なるべく、又此の詩は貞魂の二字が一篇の主眼なれば、是非とも此の文字を用ひざるべからず。虞美人草は略して美人草ともいひ、又和名ひなげしといふ。さて全體の意味は、項羽は力が盡きて、天下の霸者たる元氣も消え失せ、四面楚歌の聲の裏に、天運の盡きたるを恨んで、其の恨はいつまでも絶ゆることなかるべし。此の時に當り項羽と共に死を同うしたる虞美人は、其の貞しき魂が設ひ化して原頭の草と作るとも、東風を逐つて漢の郊野には入らずといふ。前に草といひたる故、それに因んで、東風といひ、又郊といつて、花を咲かす東風、即ち春風を逐つて漢の郊野に移つて、美しき花を咲かす事はせぬといひ、一死以て項王に殉ずとも、節操を曲げて漢王に従ひ、漢の宮中



に入ることはせずといへる意味を寓せるなり。是れも亦虞美人の眞情を推測して、其の節操を賞揚せるなり。

十五

さる程に項王は、件の驪に打跨り、旗下の壯士同じく騎して従ふ者八百餘人、其の夜直に一方の圍を打破り、南を指して馳せ去れり。明方に至つて、漢軍之を覺り、騎兵の將灌嬰に命じて五千騎を以て追撃せしむ。項王淮水を渡る時、騎の能く附隨ふ者百餘人に過ぎず。其の他は主を捨て、落失せたる者もあらん。又落後したる者もあらん。項王陰陵に至り、道を踏み迷へり。一人の田舎老爺に道を問ふ。此の老爺漢の間

落後しりへ  
におつ、即ち  
と。おくれるこ

者と見え、給いて曰く、

「左へ御出でなさい。」

項王教に従ひ左すれば、道もなき大澤の中に陥りぬ。是れが爲、兎角する中に、漢の騎兵に追ひ付かる。項王復た兵を引いて東を指して走り、東城に至れり。此の時は最早二十八騎と爲り、漢の騎兵の追ふ者は數千人なりき。項王自ら脱れがたきを度り、其の騎に謂つて曰く、「吾れは兵を起してより今に至るまで八年である。其の間身親ら七、十餘戰したるが、當る所の者は破れ、撃つ所の者は服して、未だ嘗て一度も敗北した事はなく、遂に霸者と爲つて天下を掌握した。然るに今卒にここに困む事と爲つた。これは畢竟天が我れを亡すので、戦の罪ではない。今日は固より死を決して居る。因て諸君の爲に決戦して、必ず三度勝つて、諸君の爲に圍を打破り、將を斬り、旗を刈り倒し



て諸君に天が我を亡すので、戦の罪でない事を知らせやう。いひ終つて、二十八騎を四隊に分ち、四方に嚮はしむ。漢軍七重八重に之を包圍す。項王其の騎に謂つて曰く、

「吾れ諸君の爲に彼の一將を討取つて見せん。」

四面の騎を馳せ下らしめ、山東にて三箇處に陣取るべき事を命じ、是に於て項王吶喊して馳せ下る。漢軍其の勢に畏れ、草の風に靡くが如く、中を開いて通しけり。項王遂に漢の一將を討取れり。是れ一勝なり。是の時赤泉侯騎兵の將と爲り、項王を追ふ。項王目を瞋らして之を叱す。赤泉侯人馬俱に驚き、辟易して退却すること數里なりきといふ。是れにて二勝なり。項王豫ての約束の如く、其の騎と會つて三箇處に陣取る。漢軍項王の所在を知らず、いづれ此の三箇處の中に居るに相違なしとて、是れも亦軍を分つて三隊と爲し、復び包圍せり。項王乃ち

亭宿場。

馳せて復た漢の一都尉を斬り、百人近くの人を殺せり。是れにて三勝なり。かくて復た其の騎を一箇所に聚め、之を點檢するにたゞ其の兩騎を亡ふのみなりき。項王乃ち其の騎に謂つて曰く、  
「どらぢや。」  
騎皆恐れ入つて曰く、

「大王の仰せの通りで御座います。」

是に於て項王乃ち東の方烏江を渡らんと欲せり。烏江の亭の長船を岸に繋いで項王を待ち受け、項王にいへるやう、

「江東は小なりとは申せども、兎に角に地方千里もあつて、人口も數十萬人御座れば、亦王と爲るに足ります。願くは大王には急に御渡りなされよ。船はたい是れ限り外には御座いませぬ故、漢軍が参りましても渡ることとは出来ません。サア、お早く御渡りなさいませ。」



項王笑つて曰く、

「天が我れを亡ぼす時節到來したといふものだ。我れ何を天に逆つて渡ることゝを爲さうや。且籍は最初江東の子弟八千人と江を渡つて西に向つて出陣したが今一人も生きて還る者が無い。縦ひ江東の父兄が憐んで我れを王としてくれたにせよ、我れ何の面目あつて彼れを見ることが出来やう。縦ひ彼れは口に出していはぬまでも籍は獨心に愧づかしう思はずに居られやうや。折角の好意ぢやが斷る。」

かくいつて又亭の長にいへるやう、

「吾れは貴公の長者なることを知つた。吾れは此の馬に騎ること、今日まで五年の間である。此の馬の向ふ所は敵する者一人もなく嘗ては一日に行くこと千里であつた。今之を殺すに忍びぬから貴公

故人舊友。

に進ぜやう可愛がつてくれ。かくて残れる騎馬の者をして皆馬より下りて歩行せしめ、劍を取つて接戦す。項王一人のみにても漢軍數百人を殺せり。されど項王も亦其の身金鐵にあらざれば、十餘創を被つて疲れ果てぬ。願みて漢の騎司馬呂馬童を見て、苦しき息の下より「若は吾が故人の呂馬童ではないか」といふ。呂馬童項王の今際の有様を見て、見るに見かね、背を向いて側に立てる王翳を見て項王を指し、これが項王で御座す。」

項王再び呂馬童の方に向ひ、「吾れは漢が千金と萬戸の邑とを以て我が頭を購ふと聞く、吾れは若が爲に徳を取らせてやらう。」



いふより早く劔を頸に押當て自ら刎ねて死せり。稀世の英雄項王も  
 こゝに至り三十一歳を一期として朝の露と消え失せぬ。  
 王翳進んで其の頭を取る。餘の騎は項王の指一本にても之を取つ  
 て手柄にせんとて先を争つて踐みあひ同士打して死する者數十人最  
 後に郎中の騎楊喜騎司馬呂馬童郎中呂勝楊武の四人項王の手を取る  
 もあり足を取るもありたり。五人の者後に其の體を會せ見たるに全  
 く項王に相違なかりしかば漢王其の功を稱し萬戸の邑を分つて五と  
 爲し呂馬童を封じて中水侯と爲し王翳を封じて杜衍侯と爲し楊喜を  
 封じて赤泉侯と爲し楊武を封じて吳防侯と爲し呂勝を封じて涅陽侯  
 と爲せり。  
 項王已に死して楚の地皆漢に降れるにたゞ獨魯のみ下らず。漢乃  
 ち天下の兵を引いて之を屠らんと欲せしが魯人の禮義を守り己が主

君の爲には節に死せんこと必定なるを察し力争して徒に人命を絶た  
 んよりは事實を知らせて降伏せしむるに如かずと思ひ項王の頭を持  
 つて之を魯人に視しけるに魯の父兄果して無事に降伏せり。始め楚  
 の懷王は初めて項籍を封じて魯公と爲し又其の死するに及び魯は最  
 後に降伏せり。此の緣故により魯公の禮を以て項王を穀城に葬り漢  
 王之れが爲に哀を發じ泣いて去れり。又諸の項氏の枝屬も漢王皆誅  
 せず乃ち項伯を封じて射陽侯と爲し桃侯平臯侯玄武侯皆項氏の一  
 族なりしが是れ等の人々に劉氏の姓を賜ひ漢の臣下と爲せり。

項王垓下の圍を破つて烏江に至り之を渡らんと欲せしが亭の長の  
 勸を聞くに及び笑つて其の勸を拒絶せり。是れ前後矛盾せるが如し。  
 これに就き古人論じて曰く羽の垓下を去りしは猶脱せんことを冀へ  
 るなり。然るに田舎老爺に給れて大澤の中に陥れり。亭の長の言餘



りに深切過ぎたる故、羽は或は田舎老爺と同一の間者なるかとの疑念より、寧潔く戦死せんと覺悟し、天の我れを亡す云々の言を以て其の勸を拒絶せしならん。羽をして果して烏江を渡る意なしとせば、豈兵を引いてこゝまで落延ぶる必要あらんやと。是れ或は然らん、笑の一字大に深意あるもの、如し。

これにつき唐人の詩二首あり、一は渡つて再舉を謀るがよしといひ、一は渡つて再舉を謀るは男兒の恥辱なりといふ、其の説の適否は姑く置いて、左に其の詩を示さん。

烏江項羽廟

唐杜牧

勝敗兵家不可期、包羞忍恥是男兒。  
江東子弟多豪俊、卷土重來未可知。

軍の勝敗は、兵法家と雖も豫期しがたきものなり。故に敗北したればとて、意に介するに足らず。たゞ其の恥を忍んで、再舉を謀り、汚名を雪ぐを以て眞の男兒とはいふなり。此の二句は恰も論文の冒頭の如きものにて、先づ概論を爲したるなり。然る後本文に入り、さて項羽は垓下の一戦に敗北したるが、江東の子弟は豪傑俊才の士多き故、一旦の恥を忍んで、烏江を渡り、是れ等の子弟を驅つて再舉を謀らば、席を片端より巻くが如くに勢鋭く土地を侵略して、重ねて中原に來り、勝敗を争ふこと、未だ必ずしも不可能にあらず。然るに一旦の恥を忍ぶ能はずして討死したるは、惜むべきことなりといふ。因に一旦失敗したる者が、更に盛返すことを「卷土重來」といふは、此の詩より起れるものなり。

烏江

唐胡曾



爭<sup>ヒ</sup>帝<sup>ヲ</sup>圖<sup>ツ</sup>王<sup>ヲ</sup>勢<sup>ヲ</sup>已<sup>ニ</sup>傾<sup>ク</sup>。八千兵散楚歌聲。  
烏江不是無船渡。恥<sup>ツ</sup>向<sup>ツ</sup>東吳再起兵。

項羽は帝と爲らん王と爲らんとて漢王と競争しけるが其の勢已に傾いて、垓下に至つて四面楚歌の聲を聞きける時には最早部下八千の兵も散々と爲れり。かくて烏江を渡らんと欲せば船渡なきにあらざかしが東吳に向つて再び兵を起すことを恥ぢて潔く戦死せりといひ項羽は實に快男兒なりとて稱讚したるなり。

十六

此の贊は二大段と做して看るべし。即ち前段は項羽の善き所を揚げて、後段は項羽の悪しき所を抑へたるなり。而して揚の中に二層あり、抑の中に三層あり。之を要するに一贊中五層轉折して感慨窮らず論贊の妙を極めたるものなり。

太史公曰く「私はかういふ事を周生に聞いた、古の帝舜の目は慥には分らぬがなんでも重瞳子であつたといふ事だ。處で又人から聞いたには、項羽も亦重瞳子であつたさうな。」此の話で見ると、項羽といふ人は、事によつたら帝舜の子孫で、祖先よりの遺傳性を受けて、そんな目付の人であつたのかしらん。マア、なんといふ興ることの暴であつたのだらう。祖先が祖先だから、謂はゆる「積善の家には必ず餘慶あり」で、祖先のお蔭で、其のやうに暴に興ることが出来たのだらう。「以上は項羽の凡人と異なりし事を揚げたるものにて、之を第一層とす。」



「さて秦が其の政を仕損じた爲、天下が亂れて、陳涉が第一番に軍を起して、秦に叛いた處が、それから豪傑が彼處此處に蠶起して、相互に争つた。其の人数は數へきれぬ程澤山であつた。此の豪傑共と競争して、天下を取らうとするとは、中々容易の業ではない。然るに項羽は僅ばかりの土地をも持つて居らぬ身分でありながら、天下の形勢に乗じて腕一本で田舎から起つて、三年にして遂に齊、趙、韓、魏、燕の五諸侯を將ゐて、秦を滅して、天下を分ち裂いて、王や侯を封じて、政は凡て項羽の指圖から出て、自らを號して西楚の霸王と爲た。其の位は終を全うしなかつたといへ、兎に角大昔は知らぬこと、二、三百年以來是れ程成功した者は一人もない。以上は項羽の功業を揚げたるものにて、之を第二層とす。

處で項羽が關中の形勝の土地を背き去つて、本國の楚を懐しく思つて、義帝を放逐して、自ら西楚の霸王となるに及んで、天下の王や侯が己れに叛くことを怨んだが、そんな事では天下を統一することはむづかしい。以上は項羽の失策を抑へたるものにて、之を第三層とす。

「さうして自分の手柄を鼻に掛けて、自分勝手の智恵ばかり用ひて、少しも古を師とすることを爲さないで、これが霸王の業といふものだといつて、力盡で四方を征伐して、天下を治めやうとした。それが爲、タツタ五年で卒に自分の國を亡して、其の身は東城で死んで仕舞つた。それ程になつても尙氣が付かないで、自分で自分の惡かつたことを責めなしいのは間違つて居る。以上は項羽の行爲を抑へたるものにて、之を第四層とす。

「それで死際になんといふかと思へば、天が我れを亡すので、兵を用ふる仕方の惡しき罪ではない」といつた。へんと謬つた考ではなからう



か。以上は項羽の心得を抑へたるものにて、之を第五層とす。

史記鈔解 項羽終

史記鈔錄 項羽本紀

項籍者。下相人也。字羽。初起時。年二十四。其季父項梁。梁父即楚將項燕。爲秦將王翦所戮者也。項氏世世爲楚將。封於項。故姓項氏。項籍少時。學書不成。去學劍。又不成。項梁怒之。籍曰。書足以記名姓而已。劍一人敵。不足學。學萬人敵。於是項梁乃教籍兵法。籍大喜。略知其意。又不肯竟學。

項梁殺人。與籍避仇於吳中。吳中賢士大夫皆出項



梁下。每吳中有大繇役及喪。項梁常爲主辦。陰以兵法部勒賓客及子弟。以是知其能。秦始皇帝游會稽。渡浙江。梁與籍俱觀。籍曰。彼可取而代也。梁掩其口曰。毋妄言。族矣。梁以此奇籍。籍長八尺餘。力能扛鼎。才氣過人。雖吳中子弟皆已憚籍矣。

二

秦二世元年七月。陳涉等起大澤中。其九月。會稽守通謂梁曰。江西皆反。此亦天亡秦之時也。吾聞先卽制人。後則爲人所制。吾欲發兵。使公及桓楚將。是時桓楚亡在澤中。梁曰。桓楚亡。人莫知其處。獨籍知之。

耳。梁乃出。誠籍持劍居外待。梁復入。與守坐。曰。請召籍。使受命。召桓楚。守曰。諾。梁召籍入。須臾。梁胸籍曰。可行矣。於是籍遂拔劍斬守頭。項梁持守頭。佩其印綬。門下大驚。擾亂。籍所擊殺數十百人。一府中皆懼。伏莫敢起。梁乃召故所知豪吏。諭以所爲。起大事。遂舉吳中兵。使人收下縣。得精兵八千人。梁部署吳中豪傑爲校尉。候司馬。有一人不得用。自言於梁。梁曰。前時某喪。使公主某事。不能辦。以此不任用。公衆乃皆伏。於是梁爲會稽守。籍爲裨將。徇下縣。

三



居鄴人范增年七十素居家好奇計往說項梁曰陳勝敗固當夫秦滅六國楚最無罪自懷王入秦不反楚人憐之至今故楚南公曰楚雖三戶亡秦必楚也今陳勝首事不立楚後而自立其勢不長今君起江東楚蠶起之將皆爭附君者以君世世楚將為能復立楚之後也於是項梁然其言乃求楚懷王孫心民間為人牧羊立以為楚懷王從民所望也陳嬰為楚上柱國封五縣與懷王都盱台項梁自號為武信君

四

項梁起東阿西北至定陶再破秦軍項羽等又斬李

由益輕秦有驕色宋義乃諫項梁曰戰勝而將驕卒惰者敗今卒少惰矣秦兵日益臣為君畏之項梁弗聽乃使宋義使於齊道遇齊使者高陵君顯曰公將見武信君乎曰然曰臣論武信君軍必敗公徐行即免死疾行則及禍秦果悉起兵益章邯擊楚軍大破之定陶項梁死

五

初宋義所遇齊使者高陵君顯在楚軍見楚王曰宋義論武信君之軍必敗居數日軍果敗兵未戰而先見敗徵此可謂知兵矣王召宋義與計事而大說之

說音エツ、  
悦と通ず。







王懷王因使項羽爲上將軍。當陽君蒲將軍軍皆屬項羽。

六

項羽已殺卿子冠軍。威震楚國。名聞諸侯。乃遣當陽君蒲將軍將卒二萬渡河。救鉅鹿。戰少利。陳餘復請兵。項羽乃悉引兵渡河。皆沈船。破釜。燒廬舍。持三日糧。以示士卒必死。無一還心。於是至則圍王離。與秦軍遇。九戰絕其甬道。大破之。殺蘇角。虜王離。涉間不降。楚自燒殺。當是時。楚兵冠諸侯。諸侯軍救鉅鹿。下者十餘壁。莫敢縱兵。及楚擊秦。諸將皆從壁上觀。

轅門軍行は  
車を以て陳を  
爲り、轅を向  
ひ合せて門と  
爲す。故に轅門  
といふ。

楚戰士無不一以當十。楚兵呼聲動天。諸侯軍無不人人惴恐。於是已破秦軍。項羽召見諸侯將。入轅門。無不膝行而前。莫敢仰視。項羽由是始爲諸侯上將軍。諸侯皆屬焉。

七

函谷關有兵守關。不得入。又聞沛公已破咸陽。項羽大怒。使當陽君等擊關。項羽遂入。至于戲。西沛公軍霸上。未得與項羽相見。沛公左司馬曹無傷使人言於項羽曰。沛公欲王關中。使子嬰爲相。珍寶盡有之。項羽大怒曰。旦日饗士卒。爲擊破沛公軍。當是時。項



羽兵四十萬。在新豐鴻門。沛公兵十萬在霸上。范增說項羽曰。沛公居山東時。貪於財貨。好美姬。今入關。財物無所取。婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其氣。皆爲龍虎。成五采。此天子氣也。急擊勿失。楚左尹項伯者。項羽季父也。素善留侯張良。張良是時從沛公。項伯乃夜馳之沛公軍。私見張良。具告以事。欲呼張良與俱去。曰。毋從俱死也。張良曰。臣爲韓王送沛公。沛公今事有急。亡去不義。不可不語。良乃入。具告沛公。沛公大驚曰。爲之奈何。張良曰。誰爲大王爲此計者。曰。鯁生說我。曰。距關。毋內諸侯。秦地可盡王。

也。故聽之。良曰。料大王士卒足以當項王乎。沛公默然曰。固不如也。且爲之奈何。張良曰。請往謂項伯。言沛公不敢背項王也。沛公曰。君安與項伯有故。張良曰。秦時與臣游。項伯殺人。臣活之。今事有急。故幸來告良。沛公曰。孰與君少長。良曰。長於臣。沛公曰。君爲我呼入。吾得兄事之。張良出。要項伯。項伯卽入見沛公。沛公奉卮酒爲壽。約爲婚姻。曰。吾入關。秋毫不敢有所近。籍吏民。封府庫。而待將軍。所以遣將守關者。備他盜之出入。與非常也。日夜望將軍至。豈敢反乎。願伯具言臣之不敢倍德也。項伯許諾。謂沛公曰。且



日不可不蚤自來謝項王。沛公曰：諾。於是項伯復夜去。至軍中，具以沛公言報項王。因言曰：沛公不先破關中，公豈敢入乎？今人有大功而擊之不義也。不如因善遇之。項王許諾。沛公旦日從百餘騎來見項王，至鴻門，謝曰：臣與將軍戮力而攻秦，將軍戰河北，臣戰河南，然不自意能先入關破秦，得復見將軍於此。今者有小人之言，令將軍與臣有郤。項王曰：此沛公左司馬曹無傷言之，不然籍何以至此。項王即日因留沛公與飲。項王項伯東嚮坐，亞父南嚮坐，亞父者，范增也。沛公北嚮坐，張良西嚮侍，范增數目項王，舉

所佩玉玦以示之者三，項王默然不應。范增起，出召項莊，謂曰：君王為人不忍，若入前為壽，壽畢請以劍舞，因擊沛公於坐，殺之不者，若屬皆且為所虜。莊則入為壽，壽畢曰：君王與沛公飲，軍中無以為樂，請以劍舞。項王曰：諾。項莊拔劍起舞，項伯亦拔劍起舞，常以身翼蔽沛公，莊不得擊。於是張良至軍門，見樊噲，樊噲曰：今日之事何如？良曰：甚急，今者項莊拔劍舞，其意常在沛公也。噲曰：此迫矣，臣請入與之同命。噲即帶劍擁盾入軍門，交戟之衛士欲止不內，樊噲側其盾以撞衛士，仆地。噲遂入，披帷西嚮立，瞋目視項

交戟 軍中な  
れば、衛士は  
兩方より戟を  
交へて立つ。







疆紀信等四人持劍盾步走從酈山下道芷陽間行  
 沛公謂張良曰從此道至吾軍不過二十里耳度我  
 至軍中公乃入沛公已去間至軍中張良入謝曰沛  
 公不勝枵枵不能辭謹使臣良奉白璧一雙再拜獻  
 大王足下玉斗一雙再拜奉大將軍足下項王曰沛  
 公安在良曰聞大王有意督過之脫身獨去已至軍  
 矣項王則受璧置之坐上亞父受玉斗置之地拔劍  
 撞而破之曰唉豎子不足與謀奪項王天下者必沛  
 公也吾屬今爲之虜矣沛公至軍立誅殺曹無傷

八

枵枵 枵は杯  
 又は盃に同  
 なり。枵は柄枵  
 督過たし  
 とがむ

居數日項羽引兵西屠咸陽殺秦降王子嬰燒秦宮  
 室火三月不滅收其貨寶婦女而東人或說項王曰  
 關中阻山河四塞地肥饒可都以霸項王見秦宮室  
 皆以燒殘破又心懷思欲東歸曰富貴不歸故鄉如  
 衣繡夜行誰知之者說者曰人言楚人沐猴而冠耳  
 果然項王聞之烹說者項王使人致命懷王懷王曰  
 如約乃尊懷王爲義帝項王欲自王先王諸將相謂  
 曰天下初發難時假立諸侯後以伐秦然身被堅執  
 銳首事暴露於野三年滅秦定天下者皆將相諸君  
 與籍之力也義帝雖無功故當分其地而王之諸將



皆曰善。乃分天下立諸將為侯王。項王范增疑沛公之有天下業已講解。又惡負約。恐諸侯叛之。乃陰謀曰。巴蜀道險。秦之遷人皆居蜀。乃曰。巴蜀亦關中地也。故立沛公為漢王。王巴蜀漢中。都南鄭。而三分關中。王秦降將。以距塞漢王。

漢之元年四月。諸侯罷戲下。各就國。項王出之國。使人徙義帝曰。古之帝者。地方千里。必居上游。乃使使徙義帝長沙。郴縣。趣義帝行。其群臣稍稍背叛之。乃陰令衡山臨江王擊殺之江中。

九

春。漢王部五諸侯兵。凡五十六萬人。東伐楚。項王聞之。即令諸將擊齊。而自以精兵三萬人。南從魯出胡陵。四月。漢皆已入彭城。收其貨寶美人。日置酒高會。項王乃西從蕭。晨擊漢軍。而東至彭城。日中大破漢軍。漢軍皆走。相隨入穀泗水。殺漢卒十餘萬人。漢卒皆南走山。楚又追擊至靈壁。東睢水上。漢軍却。為楚所擠。多殺漢卒。十餘萬人。皆入睢水。睢水為之不流。圍漢王三匝。於是。大風從西北而起。折木發屋。揚沙石。竊冥晝晦。逢迎楚軍。楚軍大亂。壞散。而漢王乃得與數十騎遁去。欲過沛。收家室。而西楚亦使人追之。



沛取漢王家。家皆亡。不與漢王相見。漢王道逢得孝  
惠魯元。乃載行。楚騎追漢王。漢王急推墮孝惠魯元  
車下。滕公常下收載之。如是者三。曰。雖急。不可以驅。  
奈何棄之。於是遂得脫。求太公呂后。不相遇。審食其  
從太公呂后。間行求漢王。反遇楚軍。楚軍遂與歸報。  
項王。項王常置軍中。是時呂后兄周呂侯。為漢將。兵  
居下邑。漢王間往從之。稍稍收其士卒。至滎陽。諸敗  
軍皆會。蕭何亦發關中老弱未傅。悉詣滎陽。復大振。  
楚起於彭城。常乘勝逐北。與漢戰滎陽。南京索間。漢  
敗楚。楚以故不能過滎陽而西。

十

漢王之敗彭城。諸侯皆復與楚而背漢。漢軍滎陽。築  
甬道屬之河。以取敖倉粟。漢之三年。項王數侵奪漢  
甬道。漢王食乏。恐請和。割滎陽以西為漢。項王欲聽  
之。歷陽侯范增曰。漢易與耳。今釋弗取。後必悔之。項  
王乃與范增急圍滎陽。漢王患之。乃用陳平計。間項  
王。項王使者來。為太牢具。舉欲進之。見使者。詳驚愕。  
曰。吾以為亞父使者。乃反。項王使者更持去。以惡食  
食項王使者。使者歸報項王。項王乃疑范增與漢有  
私。稍奪之權。范增大怒。曰。天下事大定矣。君王自為

太牢 牛羊豕  
具 へたるを  
太牢といふ。



賜骸骨君に事へては、身を捧ぐれば、毛髮も其の故にあらざる。故に骸骨を賜はるといふ。之願賜骸骨歸卒伍項王許之行未至彭城疽發背而死。

十一

漢將紀信說漢王曰事已急矣請爲王誑楚爲王王可以間出於是漢王夜出女子滎陽東門被甲二千人楚兵四面擊之紀信乘黃屋車傳左纛曰城中食盡漢王降楚軍皆呼萬歲漢王亦與數十騎從城西門出走成臯項王見紀信問漢王安在信曰漢王已出矣項王燒殺紀信

十二

匈匈かまびさわぐ意。

楚漢久相持未決丁壯苦軍旅老弱罷轉漕項王謂漢王曰天下匈匈數歲者徒以吾兩人耳願與漢王挑戰決雌雄毋徒苦天下之民父子爲也漢王笑謝曰吾寧鬪智不能鬪力項王令壯士出挑戰漢有善騎射者樓煩楚挑戰三合樓煩輒射殺之項王大怒乃自被甲持戟挑戰樓煩欲射之項王瞋目叱之樓煩目不敢視手不敢發遂走還入壁不敢復出漢王使人問之乃項王也漢王大驚於是項王乃卽漢王相與臨廣武間而語漢王數之項王怒欲一戰漢王不聽項王伏弩射中漢王漢王傷走入成臯



十三

是時漢兵盛食多項王兵罷食絕漢遣陸賈說項王請太公項王弗聽漢王復使侯公往說項王項王乃與漢約中分天下割鴻溝以西者為漢鴻溝而東者為楚項王許之即歸漢王父母妻子軍皆呼萬歲漢王乃封侯公為平國君

項王已約乃引兵解而東歸漢欲西歸張良陳平說曰漢有天下大半而諸侯皆附之楚兵罷食盡此天亡楚之時也不如因其機而遂取之今釋弗擊此所謂養虎自遺患也漢王聽之漢五年漢王乃追項王

張子房  
房は張良の字

至陽夏南止軍與淮陰侯韓信建成侯彭越期會而擊楚軍至固陵而信越之兵不會楚擊漢軍大破之漢王復入壁深塹而自守謂張子房曰諸侯不從約為之奈何對曰楚兵且破信越未有分地其不至固宜君王能與共分天下今可立致也即不能事未可知也君王能自陳以東傅海盡與韓信睢陽以北至穀城以與彭越使各自為戰則楚易敗也漢王曰善於是乃發使者告韓信彭越曰并力擊楚楚破自陳以東傅海與齊王睢陽以北至穀城與彭相國使者至韓信彭越皆報曰請今進兵韓信乃從齊往劉賈



軍從壽春竝行屠城父至垓下。大司馬周殷叛楚。以舒屠六舉九江兵。隨劉賈彭越。皆會垓下。〔詣項王〕。

十四

項王軍壁垓下。兵少食盡。漢軍及諸侯兵圍之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌。項王乃大驚曰。漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起飲帳中。有美人名虞。常幸從。駿馬名騅。常騎之。於是項王乃悲歌忼慨。自爲詩曰。力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。今可奈何。虞兮虞兮奈若何。歌數闋。美人和之。項王泣數行下。左右皆泣。莫能仰視。

詣項王古  
人の説に、此  
の三字餘計な  
らんといふ。

騅 蒼白の雜  
毛を騅とい  
ふ。蓋其の色  
を以て名づけ  
たるならん。

闕終なり、  
歌一曲終るな  
闕といふ。

十五

於是項王乃上馬騎。麾下壯士騎從者八百餘人。直夜潰圍南出。馳走平明。漢軍乃覺之。令騎將灌嬰以五千騎追之。項王渡淮。騎能屬者百餘人耳。項王至陰陵。迷失道。問一田父。田父給曰。左左。乃陷大澤中。以故漢追及之。項王乃復引兵而東。至東城。乃有二十八騎。漢騎追者數千人。項王自度不得脫。謂其騎曰。吾起兵至今八歲矣。身七十餘戰。所當者破。所擊者服。未嘗敗北。遂霸有天下。然今卒困於此。此天之亡我。非戰之罪也。今日固決死。願爲諸君決戰。必三



勝之。爲諸君潰圍斬將刈旗。令諸君知天亡我。非戰之罪也。乃分其騎以爲四隊。四嚮。漢軍圍之數重。項王謂其騎曰。吾爲公取彼一將。令四面騎馳下。期山東爲三處。於是項王大呼馳下。漢軍皆披靡。遂斬漢一將。是時赤泉侯爲騎將。追項王。項王瞋目而叱之。赤泉侯人馬俱驚。辟易數里。與其騎會爲三處。漢軍不知項王所在。乃分軍爲三。復圍之。項王乃馳復斬漢一都尉。殺數十百人。復聚其騎。亡其兩騎耳。乃謂其騎曰。何如。騎皆伏曰。如大王言。於是項王乃欲東渡烏江。烏江亭長檣船待。謂項王曰。江東雖小。地方

短兵 刀劍の  
長兵と 弓矢を  
對していふに  
面色々の説  
あれども相  
背くを面とい  
ふといへる  
が宜しから  
なり。即ち反對  
の意味に取る

千里。衆數十萬人。亦足王也。願大王急渡。今獨臣有船。漢軍至無以渡。項王笑曰。天之亡我。我何渡爲。且籍與江東子弟八千人。渡江而西。今無一人還。縱江東父兄憐而王我。我何面目見之。縱彼不言。籍獨不愧於心乎。乃謂亭長曰。吾知公長者。吾騎此馬五歲。所當無敵。嘗一日行千里。不忍殺之。以賜公。乃令騎皆下馬步行。持短兵接戰。獨籍所殺漢軍數百人。項王身亦被十餘創。顧見漢騎司馬呂馬童曰。若非吾故人乎。馬童面之。指王翳曰。此項王也。項王乃曰。吾聞漢購我頭千金。邑萬戶。吾爲若德。乃自刎而死。王



翳取其頭。餘騎相蹂踐爭項王相殺者數十人。最其  
 後郎中騎楊喜。騎司馬呂馬童。郎中呂勝。楊武。各得  
 其一體。五人共會其體。皆是。分其地為五。封呂馬童  
 為中水侯。封王翳為杜衍侯。封楊喜為赤泉侯。封楊  
 武為吳防侯。封呂勝為涅陽侯。項王已死。楚地皆降。  
 漢獨魯不下。漢乃引天下兵欲屠之。為其守禮義。為  
 主死節。乃持項王頭視魯。魯父兄乃降。始楚懷王初  
 封項籍為魯公。及其死。魯最後下。故以魯公禮葬項  
 王穀城。漢王為發哀。泣之而去。諸項氏枝屬。漢王皆  
 不誅。乃封項伯為射陽侯。桃侯。平臯侯。玄武侯。皆項

氏賜姓劉氏

十六

太史公曰。吾聞之周生曰。舜日蓋重瞳子。又聞項羽  
 亦重瞳子。羽豈其苗裔邪。何興之暴也。夫秦失其政。  
 陳涉首難。豪傑蠭起。相與並爭。不可勝數。然羽非有  
 尺寸乘勢起隴畝之中。三年遂將五諸侯。滅秦。分裂  
 天下。而封王侯。政由羽出。號為霸王。位雖不終。近古  
 以來。未嘗有也。及羽背關懷楚。放逐義帝。而自立。怨  
 王侯。叛已難矣。自矜功伐。奮其私智。而不師古。謂霸  
 王之業。欲以力征。經營天下。五年卒亡其國。身死東



城。尚不覺寤。而不自責過矣。乃引天亡我。非用兵之罪也。豈不謬哉。

史記鈔錄 項羽本紀 終

明治四十四年四月二十九日印刷  
明治四十四年五月二日發行

著者 秋山四郎

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社  
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右代表者 原亮一郎  
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所 東洋印刷株式會社  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

賣捌所 各府縣特約販賣所

史記鈔解項羽  
不許複製  
定價金參拾錢

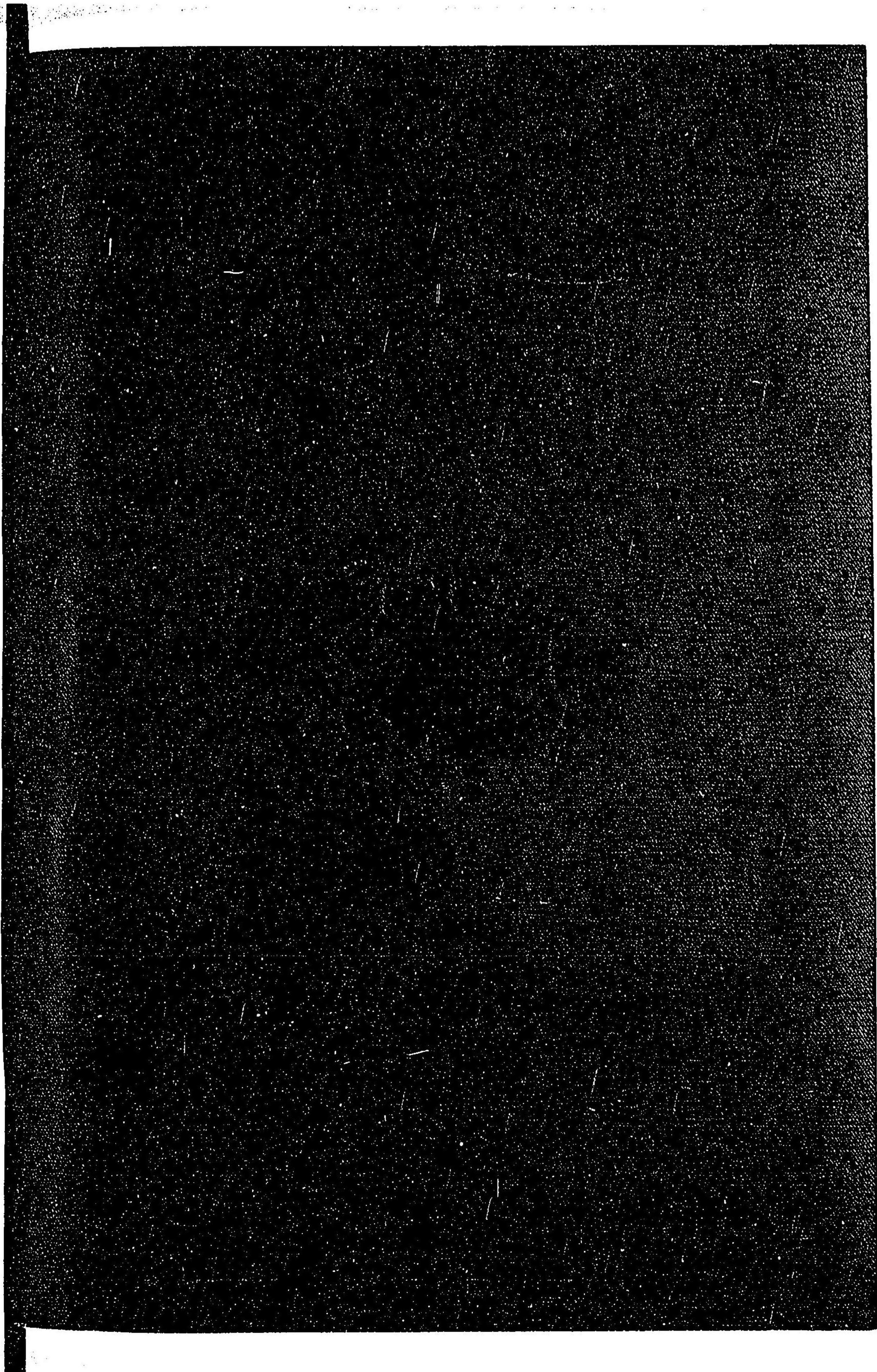






264  
871







特 71

895

301438-001-2

特71-895

史記鈔解項羽

秋山 四郎 / 著

M44.5

ACC-0001





楚歌なり、楚人の  
謳吟と、漢軍  
が如し。漢軍  
項羽が心を亂  
さん、似て楚  
人に、果して楚  
項羽の歌と楚  
人の歌とを思  
るなり。大に驚  
びなり。

頃、漢軍の四面、齊しく起れるは楚歌なりけり。項王之を聞いて、大に驚き、  
漢は皆已に楚を得たるか、何ぞ楚人の多き事よ。  
とて、暫しが程は愁に沈みしが、急度思ひ返し、今は是れまでなり、訣れの  
杯酌交さんとして、やをら起つて帳の中に酒宴を張れり。こゝに一人の  
美人ありけり、其の名を虞といふ。項王最愛の佳人にして、江東を出で  
しより以降、血の雨降らす戰場にも常に具せざるはなし。又一匹の駿  
馬ありけり、其の名を騅といふ。一日に行くこと千里、希代の逸物なれ  
ば、項王之を愛して、常に之れに乘らざるはなし。項王彼れを思ひ、此れ  
を思うて、悲歌、忼慨し、虞美人に命じて、起つて舞はしめ、自ら詩を爲つて、  
歌つて曰く、

力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝。  
騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。

今は置字にして讀まず、第一句は自讚にして、かほ山をも抜き、勇氣は、  
大千世界をも蓋ふといひ、第二句は時運の不利なるをいひ、かほどの  
力あり勇氣ある我れも時運の不利なるが爲、戰敗れ、今は愛馬の騅も力  
盡きて一步も進まずとて歎息す。第三句は上を承けて、騅は進まず、い  
かにとも爲べきや、らなしといひ、第四句は又上のいかにとも爲べきや  
らなしを承けて、虞美人に説き入り、虞や虞や若をいかにせばよからん  
と結ぶ。前は勇壯人をして神飛ばしめ、後は悲涼人をして涙下らしむ。  
實に千古の絶調といふべし。料らざりき書は姓名が書ける位で澤山  
ですといへる、彼れ項玉にして、此の名作あらんとは、信に英雄は測るべ

悲涼かなし  
くさびし。  
絶調すぐれ  
たるしらべ。